

バイオハザード～とある警官の奮闘記～

零崎極識

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アメリカ北西部に位置するラクーンシティでは最近奇妙な事件が多発していた。そしてラクーン市警の特殊部隊が真相へと迫ったのだが、その事実は何者かに葬られてしまった。

そんな状況のなか、主人公ジャック・ノリスは親友であるクリス・レッドフィールドの体験を受け入れる数少ない人物の1人だった。そんな主人公が走り抜ける、ラクーンシティの惨状とは……

目次

第1話	遭遇	1
第2話	驚愕	5
第3話	そして歯車は回り出す	9
第4話	阿鼻叫喚	16
第5話	そこで出会ったのは	22
第6話	崩壊へのカウントダウン	27
第7話	抵抗する意志	32
第8話	生命の重さ	38
第9話	脱出への手がかり	43
第10話	立ちふさがるもの	49
第11話	出口への光明	54
第12話	迫り来るもの	60
第13話	先の見えない攻防	66

第1話 遭遇

1998年 9月30日

アメリカ北西部に位置するラクーンシティはまさに地獄絵図と化していた。街の中は呻き声と腐臭に溢れかえっており生存者などはほとんどいなかった。だが、それでも生き残っている人は明日を求めて懸命に生きていた。

1998年 7月28日

遡ること2ヶ月前。ラクーンシティ市警の特殊部隊『S. T. A. R. S』がアークレイ山脈に位置する謎の洋館の調査から命からがら帰ってきた。彼らが報告書で挙げたのは、ゾンビや大型の化け物らと交戦したということだった。

もちろん、そんな話は誰も信用せず日に日にその生き残りたちは署内からハブられるようになっていた。

「よう、クリス。今日も荒れてるな」

「なんだよジャック、俺を笑うつもりか？」

「そうじゃないぜ、ただ……そうだな与太話にしちややけに信憑性があると思っただけだ」

「……俺の話をまともに取り合ってくれるのは、お前とマービン巡査だけだよ」

その日の夜、俺こと『ジャック・ノリス』と空軍時代からの親友である『クリス・レッドフィールド』は行きつけのバーで1杯引っ掛けた。俺は他の署員と違い、命からがら帰ってきた親友の話を本気で信じ、万が一に備えて対処法も教わっていた。

「ジャック、俺達はこれからアンブレラが他にも何か企んでないかを調べる。お前は どうする？」

「そうだな……付き合いたいのは山々なんだが、俺は一署員だ。そう簡単に行くもんじゃない」

俺はクリスとは違いアンブレラに対して憎しみを持っている訳では無い。まあ持つことになったら手遅れなのだろうが。

「まあそれはそうだろうな……でも俺の話しをきいてくれてありがと

う」

「なんせ親友だからな」

そしてその後も他愛のない話をしてそれぞれ家に帰ったのだった。翌日、俺はいつも通り出勤すると何やら署内でトラブルが起きていた。

「どうしたんだ？」

「おお、ジャックか……実はな……」

同僚が指で示す方に目を向けるとそこではクリスがジルとバリーに諫められており、その横では少年課のエルランが頬を殴られたように腫れ上がりながら治療を受けていた。

「やあクリス、どうしたんだ……お前らしくないな」

「ジャックか……今日はそんな気分じゃない」

「おいおいなんてこと言うんだよ、俺とお前の仲だろ？」

「……………」

クリスは無言で立ち上がるとそのままどこかへと立ち去っていった。俺はやれやれと肩を竦めながら自分の持ち場へと座る。

「はーい、ジャック」

「よう、ジル朝から大変だったな」

「まったくよ……でもまあ暴れたくなるのは分からなくもないけど」

確かに命からがら帰ってきた彼らの話を誰も信じることなくむしろ、馬鹿にするぐらいだもんな。それは怒るわ。

「とにかく……クリスをよろしく頼むぜ」

「親友のあなたがやった方がいいんじゃない？」

「……そうしたいのは山々なんだが、俺はその現場とやらを見てないからな」

心苦しいことにいくら話を聞いたところで信じられないものはまた事実だ。だからこそ迂闊なことは言えない。そんなことを考えているうちに朝礼が始まり、俺は殺人課の課長に呼ばれた。

「お前とアーノルドでここの殺人事件を調べてきてくれ」

隣にはデスクが正面のアーノルドがいる。俺との仲はそこそこいい方でたまにランチなどに行くレベルだ。

「分かりました、行つてきます」

「了解」

やる気に満ちた声と面倒そうな声を上げた2人組は事件の捜査へと向かうのだった。

□□□□□□□□

事件が起きたのはアークレイ山脈の麓、バーグという地区だった。なんでも被害者はあちこちを食いちぎられた跡があるというらしく、ラクーン市警は猟奇的殺人で捜査するらしい。

「それにしても……先輩が捜査に当たるなんて珍しいですね」

「まあな、仕方ないがな……人手が足りないしな」

ラクーンシティでは最近妙な事件が増えていて警察もかなり仕事が多くなっていた。そのためか、実働勤務である俺がこういう聞き込みに駆り出されるハメになつていたのであった。

「それにしても……聞き込みなのにそんなに武器いりますか？」

アーノルドはトランクと俺のホルスターに目を向けながらそう言った。俺は俺で、ホルスターには私物の『H&K USP』を右腰に装備し反対側には『デザートイーグル』を装備し前と太もものポーチにはUSPのマガジンを4つ入れ、トランクには『ベネリM3』のポンプショットガンとその弾薬を4ケースほど詰めていた。

「先輩は強盗犯でも捕まえに行くんですか？」

「まさかそんなわけないだろ」

ただ、俺がここまで武器を用意したのはクリス達が遭難したこの地で、現実には想像つかないような体験をしているのだ。その話を聞いていた俺が備えないはずない。

「そろそろ着きますよ」

車でかれこれ3時間も揺られてようやくたどりついたのは見た目には普通の一軒家だった。

「すみません、誰かいませんか？」

「……………」

アーノルドの声に誰も反応しないのを訝しみ俺はホルスターからUSPを抜いてスライドを引き弾を込めるとゆつくりと扉に手をか

ける。鍵はかかっておらず押すと力がそのまま伝わり開いた。

「……なんだこの匂いは……」

「妙な腐臭がしますね」

アーノルドも遅れて正式採用されているSIGPROを抜いてスライドに弾を込めた。部屋に漂う腐臭は奥の方から来ていてそこへ向けてゆつくりと歩みを進めていく。

そしてその源と思われる部屋に入っていくとそこに居たのは死体とそれに食らいつく人型のモノだった。

第2話 驚愕

「何なんですかこれは……!?!」

「くそ……どういうことだ……!」

俺はUSPを構えて照星越しにゾンビの頭へと狙いをつける。一方でアーノルドはSIGPROを構えるだけでトリガーには指を掛けていなかった。

「アーノルド!!武器を構えろ!死にたいのか!!」

俺はアーノルドにそう言うのとゾンビの頭に向けてトリガーを引く。使い慣れた銃の好ましい反動と共に弾丸が頭へと命中しそのまま崩れ落ちた。

「あ……ああ……」

「……くそ」

俺はUSPをホルスターにしまうと未だ呆然としているアーノルドの頬を張った。受けたアーノルドはやつと正気に戻ったようで俺のことを睨みつけてきた。

「そうだ、その意気だ。これから先……こういう事態になった時に対応できればいい」

「……すみません」

ひとまずそのゾンビを放置して俺は1度パトカーに戻りトランクにしまつてある武器を取り出してフル装備に切り替えた。

「なるほど、だから先輩はこんなに武器を……」

「そういうことだ、ほら」

トランクにしまつてあつたMP5をアーノルドへと渡した。

「いくぞ」

こうして体制を立て直すと再び民家の中へと入っていく。扉をあけると先程倒したゾンビは起き上がる事無く死体を跨いで部屋を調べる。喉付近を噛みちぎられた死体に近づくとまだ新しいのか血液などの凝固は起き始めたばかりだった。

「……なんで惨い……」

「最近起きてた猟奇事件はこれが原因だったのか」

「それにしても……署長は何も対策しないんですかね」

「どうだろうな……」

ひとまず部屋の中にあるものを色々調べものの特にめばしい証拠などはなかった。

「なぜゾンビがここに押し入ったんだ……」

捜査を終えて帰ろうとした時に後ろの方からうめき声とともに噛みちぎられた死体が起き上がり、襲いかかってきた。たまたま近くにいた俺は振り返るも組みつかれてしまう。

「先輩っ!!」

「くっ！早くこいつを撃て!!」

思いのほかゾンビの力が強く油断しているとすぐに噛みつかれてしまいそうだ。アーノルドは撃つのに躊躇っているらしくMP5を構えているものの銃身が震えていた。

「早く!!」

だんだんと力が無くなってきてゾンビの頭がすぐそこまで近づいたところで銃弾がゾンビの頭を貫いた。アーノルドの方を見ると肩で息をしながら狙いをつけていた。

「……よくやった」

「あ、ありがとうございます……」

寄りかかってきているゾンビを引き剥がして地面へと投げる。

「とりあえず帰るか」

調査結果を報告するために署へ帰ることにした。

□□□□□□□□

ひとまず警察署へと引き返し今回の事件の報告書を書くことにした。目の前で起きた異常事態にアーノルドはかなり憔悴しており警察署に行く前に家へと送り返していた。そして、オフィスに帰り机に向かうこと1時間、なんとか報告書を完成させたものの内容に信憑性があまりなかった。

「はあ……ほんとにやれやれだ……」

その日の夜、俺は1人で行きつけのバーに行き酒を引っ掛けていた。この報告書を出すということを考えると誰にも信用されないだ

ろうことは100%分かってはいたがそれでも書かざるを得ない。

「これがあいつらが経験した疎外感ってやつか……」

きつと、洋館事件から帰ってきたあいつらも疎外感を味わっていたと考えるとよくやっつてると思う。

そんなことを考えながらお酒を飲み終わると家への帰路につくのだった。

1998年 8月1日

結局のところ報告書は受理はされたものの誰の目にも触れることなく処分された。本来ならば一介の警官には知らされないであろう事実だが、文書係にちよつとしたコネがあり教えて貰えたのだった。

「やれやれ……どうにかならないのかね」

俺は休憩室で1人コーヒを飲みながら誰にも聞こえないため息をつく。すると、その横に誰かが来た。

「はいジャック」

「ジルか」

隣に座ったのは洋館事件で無事に生還したジル・バレンティンだった。

「隣、失礼しても?」

「ああ構わないぜ」

コーヒを片手に持ったジルが隣に腰掛けてくるとコーヒと香水の匂いが絶妙に交じったいい匂いが漂ってきた。

「そう言えば聞いたわよ、ゾンビと遭遇したらしいじゃない」

「……だが、誰も信じちゃくれないがな」

「実際そういうものなのよ。私たちだって未だにホラ吹き扱いされてるし」

「なかなかきついものがあるな」

正直な話、対策を立てなければいずれはとんでもない事態になることは目に見えているのだが、如何せん誰も協力しようとしなない。その事に苛立ちを覚えることもある。

「ねえ、ジャック……貴方私たちと一緒にアンブレラを潰さない?」

「どうしたんだ、突然？」

「私達は、あの日地獄を見たの。でも誰にも信じてもらえずに仲間が死んだことすら事故死扱い……だからこそ、仲間の為にもあれは倒したいのよ」

「……それで、理解のある俺を引き込みたいと」

「ええ、そういうことよ」

ジルの話を聞いて目を瞑り思索してみる。確かに言い分も分かりはするものの個人的な意見としては未だに動機としては不十分ではあった。

「……すまない、今はまだ先送りにさせてもらってもいいか？」

「そうね、いつでも待っているわ？」

そういうとカップに残ったコーヒを一気に飲み干したジルはカップを捨てて優雅に立ち去っていった。

そのあとは特に何も起こることなく平凡な日常が過ぎていったのだが、水面下ではとんでもないことが起きていたなど、知るよしもなかった。

第3話　そして歯車は回り出す

1998年　9月中旬

俺がゾンビと遭遇した事件以来、特に変わったことはなく普通に勤務を続けることが出来ていた。だが、その一方で警察署内では様々な変化が起きていた。具体的には扉の鍵がランプのマークを象ったものに一部変更されていたり、防火シャッターが増えていたり、どう考えても不便ではある。

そして、いつも通り出勤すると何やら他の所は忙しそうにしていた。

「おはよう、これは一体なんの騒ぎだ？」

「おはようございます、今日は有名なアメフトチームがスタジアムで試合をする日ですからね、その警備に出る人達が準備しているんですよ」

受付の女の子に事情を聞いてそう言えばそんなこともあったなと思いついていた。そんな彼らを後目に見ながら自分の事務所へといって、自分の仕事へと向き合う。

ふと気がつくとき刻はお昼を過ぎようとしていた。売店へと向かい、昼食をかうと休憩室でテレビを見ながら食べているとたまたまチャンネルはそのアメフトの試合を流していた。

「何が面白いのかねえ」

「あれ、先輩はアメフト嫌いですか？」

「嫌いと言うよりは、興味が無いな」

たまたま近くにいたアーノルドと話をしながらお昼を食べていると何やら試合が止まったようだ。

「あれ……どうしたんですかね」

「さあな、だが穏やかではなさそうだ」

俺は残りの昼食を掻き込んだと同時にサイレンが鳴った。これは緊急招集の合図だ。

「えっ!? 警報!?!」

「ただ事じゃないらしいな」

俺とアーノルドは急いで事務所へと戻るのだった。事務所に戻ると緊張の面持ちのやつもいれば、面倒くさそうな表情を浮かべているやつなど、様々な表情のやつがいた。

「諸君、たったいまスタジアムにて暴徒が暴れだしたの報告があり既に何人かが負傷している。そこで何人かを支援で回せとのお達しが出た」

課長がそう言うにあからさまに何人かが舌打ちをしたが残念なことに真つ先に指名されていた。そして俺とアーノルドは残留という形で事務所待機というお触書が出た。

「それにしても……暴徒って珍しいですね」

「まあな、国民的スポーツのアメフトでおおかた、好きなチームが負けそうだったから暴れたという魂胆だろうな」

そんなことを考えながら、俺は相棒である『H & a m p : K U S P』を丁寧に手入れしていた。

「先輩、また銃の手入れしてるんですか」

「暇だからな」

そう言いながらパーツパーツを手入れしていると今度は血相を変えて課長が入ってきた。

「スタジアムに行った連中に死傷者が出たらしい……!」

その報告に俺だけでなくほかの連中も思わず顔を見合わせるような反応を浮かべていた。話の要約としては、スタジアムの暴徒に襲われて、3名が死亡、47人が重傷を負ったらしい。けが人はラクーン病院に収容されたようだ。

「そして何でも……暴漢は銃で撃つても怯みもしなかったと……」

最後のその報告に俺は2ヶ月前のゾンビを思い出していた。もしそれが本当ならば非常に厄介なことになるだろうと。

「おまけに洋館事件で帰ってきた連中はほとんど休暇で居ないし」

クリスマス、ジル、バリーの3人は休暇でどこかへとバカンスに行つてみるみたいで定期的に届く手紙には楽しそうな写真が添付されていた。

俺は俺で、ラクーン病院へと車を走らせていた。理由としてはとて

も簡単で負傷したヤツらから話を聞くためだ。

ラクーン病院にたどり着くと中はまるで野戦病院のように慌ただしくしていた。これじゃあ、話も聞けそうにない。そう思っただけを返して外に出ようとする。先に到着していたアーノルドが俺の腕を引いた。

「先輩、やっぱり暴漢は……」

アーノルドのその先の言葉は容易に想像がついた。

「……それだけ知れば上々だ」

俺とアーノルドは車に乗って病院を後にするのだった。

1998年9月23日

その日は少しばかりどんよりとした朝だった。俺は目を覚ますとふと悪寒を感じていつも以上に出勤の準備を念入りにするのだった。そして、出勤すると何やら周りがとても騒がしい。

「ジャックさん！何してるんですか!？」

「何って、普通に出勤だが……」

「既に緊急事態宣言がかかってますよ!?!直ちに事務所に行ってくださいー!」

言われるがままに事務所に行く。ほとんどの人員が出払っていた。

「ジャック！今までどこにいたんだ!?!とにかく行くぞ!」

なんの事情も聞かずに課長に連れていかれてパトカーに乗ると猛スピードでどこかへと向かっていく。

「課長、どこに向かっているんですか?」

「どこってお前……大人数の暴漢がスタジタムから来てるんだよ!」

「暴漢……?」

そして、現場にたどり着いたのかパトカーが止まり、降りるとそこには大量のバリケードと警察隊が陣地を組んで待ち構えていた。おまけに、その周囲はピリピリとした空気が漂っており嫌な雰囲気を感じる。

「ジャックも武器を受け取って用意をするんだ」

「……はあ」

やむなく、俺は警官隊の武器庫からMP5を拝借するとマガジンを5つほど腰のポーチへと入れて準備をする。

「……課長、そんなにやばい案件なんですか？」

「ヤバいも何もとんでもないことになってるぞ」

そう言う課長はM700を借りたらしく零点規正をしながら現状を説明してくれた。どうやら、この前のスタジアムの暴漢がゆっくりと市内へ向けて来ているらしい。なんでもその数がとんでもないよううでこのようにバリケードを作ったとの事だ。

「……なるほど」

「そういう事だ」

すると周りの警官たちがざわめき出した。

「おい……！見てみろよ……！」

「なんなんだよ……！」

その周りの声に合わせて指さす方向を見るとそこには大量のゾンビの群れがあった。その数はとても数えきれない。

「有効射程に入ったやつは撃てえ！」

警官隊の長と思わしき人物が号令をかけるとスナイパーライフルを持ったやつが先制攻撃を仕掛けるも、発砲する数よりも圧倒的なまでに数が多く、まるで効いていないようにも見える。

「狙うなら頭を狙え!!」

近くにいた警官にはそういうも一介のしがない警官が言ったところで伝達するはずもなく、無駄弾を次々と使っていくだけだった。

「課長……ここは無理です！早急に逃げるべきですよ！」

リロードするタイミングで俺は課長に直談判をするも課長は聞く耳も持たずにゾンビへと発砲を続ける。

「ああ、クソ!!」

サブマシンガンの有効射程ではないため俺はパトカーへと戻り車のエンジンを付けるといつでも発進できるようにして持ち場へとつく。ゆっくりと、だが確実にゾンビ達は近づいてきてついにサブマシンガンの射程圏内に入った。

「撃てえ!!」

ほとんどの連中がトリガーを引き周囲には発砲音が鳴り響く。俺はセクターを単発にして1発1発をゾンビの頭に叩き込むも、9 m弾では威力が足りないのかなかなか倒れてくれない。そうしている間にも距離が近づいてくる。

「課長！逃げますよー！」

俺は早めに見限って課長の首根っこを掴むとパトカーへと引つ張ろうとするが、振り払われてしまった。

「何をするんだ！」

「あんたここで死にたいのか!!」

俺はたまらず叫ぶも彼我との距離は残り20メートルまで近づいていた。なかなか倒れない相手に撤退を視野に入れ始めたのか、逃げようとするやつが現れるも数が数なだけに逃げ遅れる人物もいるわけで、ついに警官隊の末端にゾンビがたどり着いた。

「うわああーやめろおお!!ああああああ!!」

何かを咀嚼するような音と絶叫が聞こえてきて周囲がパニックになった。その隙を乗じて俺は無理やり課長をパトカーに乗せるとそのまま運転席へと飛び込み、急発進する。

「……な、なんなんだ……!!」

「あれがゾンビですよ、課長」

「お前はなんでそんなに落ち着いているんだ!？」

「報告書で上げたじゃないですか、おおよそ人間じゃない怪物に出会ったって」

そう言うと課長は黙り込んでしまった。そしてしばらく運転して警察署にたどり着くと半ば放心状態の課長は無言で降りてそのまま事務所へと向かっていった。俺も自分の事務所へと向かうとそこにはアーノルドが疲れ切った表情で座っていた。

「どうした、そんなに疲れきって」

「……先輩……先輩はいつもこんな気持ちだったんですか？」

「どういうことだ？」

「……誰も信じてくれずに否定されることですよ……」

「なんだそんなことか。別に俺はなんにも気にしてないからな」

俺は溜息をつきながら椅子へと座り、借用していたMP5のマガジンから9mm弾を抜き始める。

「そうなんですか……?」

「ああ、他人がどうなるうがどうでもいいしな」

「……先輩つてとてもドライなんですね」

「そうか?身近なやつだけ助けられればそれでいいしな」

弾丸を抜きながらそう言うと、机の引き出しから一枚の写真をアーノルドへと渡す。

「これは?」

「俺が守れなかったものだ」

そこには、彼女だった人物と俺が幸せそうに写っているものだ。

「俺は、あの日彼女を守れなかった。だから、俺が守りたいものを守れるように努力したのさ」

「……だからあんなに大会とかで優勝とかしたりするんですね」

「そんなのはほんの過程にしか過ぎないさ」

最後の1発を抜くとその弾丸をUSPのマガジンへと詰めていく。

「よし、これで準備よしと」

詰めたマガジンを自分のホルスターベルトに差し込み、腰にはUSPを装備する。

「……先輩、なんでそんなにたくさん弾を持つてるんですか?」

「いつ弾丸の供給が無くなるか分からないからな」

そう言って引き出しを開けると、そこには9mmだけでなく、45口径の弾や50口径の弾、そして12ゲージの弾などを敷き詰めるかのように入っている。

「……先輩、何してるんですか」

「こういう時に備えていたのさ」

俺はそう言うとうち自分の車へと向かった。後ろからはアーノルドがちやつかり着いてきていた。車にたどり着くとトランクからデザートイーグルを取り出して左のホルスターにしまい、ベネリM3を背負ってベルトで固定すると、アーノルドへ振りむく。

アーノルドは一周まわって引いているようで心做しか距離が開い

ているような気がした。

「……………まあいい……………」

「あ、せ、先輩冗談ですよ！」

ひとまずもう一度事務所へと戻ることにした。

第4話 阿鼻叫喚

事務所に戻った俺たちを待っていたのはげっそりとやせこけた課長の姿だった。

「お前ら……署長からの指示だ。なんでもテロを警戒して弾薬を散らばらせるらしいから手伝えだ」と

「……テロと言うよりは既にウイルス災害なんだけどな」

どうにも署長の指示が的確ではないことに疑問を抱きながらもその作業をするために地下の弾薬庫へと向かうのだった。まだまだほかの署員は余裕を持って言われた通りに指示に従っていたが、俺はこの指示にやはり納得がいつていなかった。

「先輩どうしたんですか？」

「……こんなことをすれば万が一があつた時に弾薬の確保が難しくなると思つてな」

「まあ確かにそうですが、裏を返せばここが占拠されても対処はできますよ？」

「それはそうだが……ここが占拠されるつていうのは身内からの裏切りしかないんだけれどな」

弾薬庫のセキュリティ的にはカードキーの管理者とパスワードの二重管理がされており署員はパスワードこそ知つてはいれど、カードキーは管理者立ち会いでしか開けられないようになっていた。

ひとまず弾丸を台車に乗せると、署内のあらゆる所に運んでいく。待合室や、資料室はもちろんのこと、物置や美術品倉庫などにまで置くのはやりすぎなような気もした。

「ふう……これで終わりか」

気がつくとも既に時刻は朝になっており決して浅くない疲労が体に残っていた。本当は家に帰りたいが、なんでも緊急事態宣言のせいだ署内で待機するようになっていて帰りたくても帰れなかった。仕方なく、署内のシャワー室でシャワーを浴びて仮眠室で仮眠とることにする。

何時間か寝ていたところで俺は体を揺さぶられる感覚で目を覚ま

す。そこにはアーノルドが必死な表情を浮かべていた。

「先輩ッ！大変です！署内にゾンビが……！」

その言葉に俺は跳ね起きて急いで現場へと向かう。

警察署は広大な美術館を改造したもので外柵というものが少しばかり遠いところにあり、その外柵にゾンビ共がしがみついている状況のようだ。

「既に何ヶ所かは柵を超えてきたゾンビが居るようで……対処はしているらしいのですが」

「ちっ……もうここまで来るとバリケードを作って侵入を防ぐしかない」

周りの警官たちもバリケードの素材を持ってくるためにパトカーや突入用のボックスカーなどを持ってきていた。俺もその作業に加わっているとどうやら柵を超えてきたゾンビが現れたようで警官隊が必至に抵抗していた。

「頭を撃てば止まるぞー！」

そう言う俺は抵抗している警官隊を援護するようにUSPを抜くと2発立て続けに頭を撃ち、崩れ落ちるゾンビを後目に油断なく次の相手へと構える。

「急げ、モタモタすると間に合わんぞ」

「は、はいっ」

俺は柵を越えようとするゾンビの腕や頭を撃ち、丁重にお断りを続けているとどうやらバリケードが完成したらしい。

「よし、撤退するぞー！」

指揮官が号令をかけるとそろそろと署内へと撤収を始める。俺とアーノルドは殿を務めるも特に何事もなく無事に帰りつくことができた。

「使った弾薬はマガジン1つか……」

事務所に戻るとすぐに弾薬を補充するとコーヒーを入れて休憩する。その隣でアーノルドは落ち着かない様子でソワソワしていた。

「どうしたアーノルド」

「先輩……俺は怖いんです、いつ死ぬかもわからないし、あいつらと対

峙して引き金を引けるかも……」

そんなことを言うアーノルドに対して俺は肩に手をおいた。

「それが普通の感情だ。だが、判断だけは誤るな。戦ってもいいし逃げてもいい……けれど死ぬことだけは絶対にダメだ」

「先輩……」

その言葉にアーノルドは少しばかり表情が明るくなり俺もほっとしたのだった。その後も何度か、招集がかかりその度に戦闘を繰り返すも、戦果は芳しくなく着々と警官の数は減っていたのだった。

1998年9月25日

度重なるゾンビとの戦闘に警官は徐々に数を減らしていた。それに追い打ちをかけるように負傷して死んだ警官がゾンビとなって甦り、さらに状況は悪化していた。

その一方で、警察署の中では何者かによる妨害行為なのか、外部との連絡が一切取れなくなり支援を求めるのは絶望的な状況になっていた。

「諸君、我々は今窮地に立たされている。度重なる戦闘で負傷者は増え、弾薬もそこが見え始めた。そこでだ、これから我々は散らばった弾薬を回収し、この警察署からの脱出を考える」

会議室で開かれている作戦会議。それは今署内に残っている生存者を救出し、警察署、ひいてはラクーンシティからの脱出を試みるための内容だった。周りの警官もかなり数は減ってきており、疲労の色も濃い。

「それで、散らばった弾薬を探す組と生存者を救出する組に別れる訳だが……ジャックとアーノルドの2人で署内を回ってくれ」

「まあそれが賢明な判断だろうな」

既に戦える奴らは食われたか、怪我をしていて動けないかの2択だ。周りにいる連中も臆病風に吹かれて自分の命を大事にしてきた連中ばかりだった。

「マービンも大変だな」

「そう言うなよ、それにこっちはエリオットとデビットもいる、なん

とかなるさ」

今名前の上があった3人はそれぞれが優秀な署員だ。彼らに任せていけば何も問題はないだろう。

「何かあつたら連絡しろ」

「もちろんだとも」

俺はマービンから通信機を受け取るとアーノルドを引き連れて会議室を出るのだった。会議室を出ると外は暗く、月明かりもそんなくない暗い景色が広がっている。

「先輩……」

「大丈夫だ、お前の手に持っているのは一級品だろ？」

俺は事前にバリーからもらっていたS・T・A・R・Sに配給されている『サムライエッジ』をアーノルドへと渡していた。

「そいつの信頼性は折り紙付きだぜ、あとは自分を信じろよ。背中に背負っているランチャーもな」

アーノルドの背中には中折式のグレネードランチャーがあり対応する弾薬も火炎弾と榴弾をそれぞれ5発ずつ持たせてある。

「というわけで、探索へと出かけようじゃないか」

ひとまずは屋上へと向かうためにホール経由で反対側へと向かうことにしたのだった。会議室から出て資料室の面する廊下を歩くと外に面する窓からは、遠くで上がる火の手で照らされた建物などがみえる。

「……外はとんでもないことになってますね」

「まあしようがないだろうな、恐らくこの分だと都市機能も麻痺してるだろうしな」

そんなことを話しながら奥の扉を開けて待合室へと入る。待合室には何人かの民間人が不安な様子で座っていたり寝ていたりしている。

「ひとまずこの待合室がセーフゾーンっていうわけですか……」

「ここまで生存者を連れてくればいいんだだろうな」

生存者たちを後にしてホールへの扉を開ける。ホールに出ると巨大な女神像にちらっと目を向けるとその横を通り2階へと上がって

いく。

「この女神像の下に地下に続く通路があるらしいですよ？」

「わざわざこんな大掛かりな仕掛けを作らなくてもいいと思うんだがね」

おまけに仕掛けの解き方を分からない署員もいるようで本当に管理が行き届いてないなど感じるのだった。ホールを抜けて待合室を抜けると美術品倉庫前の廊下へと出る。ここからひとまず屋上へと向かうのだが、なんとなく嫌な予感がして、念のためにUSPを抜く。屋上へと続く扉を開けるとそこには多数のゾンビが階段からゆっくりと上がってきていた。

「おいおい……冗談だろ？」

「これはっ……！」

あまりにも数が多く、この先を探索するのは困難だと判断すると踵を返して廊下へと戻り近くにあった木材で扉を封鎖すると別のルートで署内を回ることにした。

「あんな大群に囲まれたら一溜りもないな」

「……けれどいずれはあいつらが……」

「恐らくはそうなるだろうな」

俺達は美術品倉庫の前を通り反対側の方へと移動する。その通路は署長室へと続いているがそこは無視して1階へと移動する。

1階に降りると宿直室が面した通路に出るがそこにもゾンビが2体ほどたむろしていた。幸いにして向こうはまだ気づいておらず、ひとまずは宿直室へと入ってみる。中は特に変わった様子もなく、奥の所へ移動するとベッドの上に手帳のようなものが置いてあった。

「えつと……なんだこれ、チェスの話か……」

中には親しくなった老人とチェスをしたが勝てずじまいだった内容が書かれていた。とりあえずその手帳をポケットへとしまい、廊下へともどる。

「いいか、極力弾は使わずに行くぞ」

そういうと俺はまずゾンビの後ろへと忍び寄るとそのまま首に手をかけて勢いよく首の骨を折りそのまま壁へと押し出す。物音に気

づいたゾンビがこちらに振り向きにじりよってくるが、掴まれる前にその腹へとミドルキックを繰り出して、よろけさせると流れるように反対の足で側頭部を蹴り抜く。勢いの乗った蹴りを食らうと壁へと叩きつけられて動かなくなつた。

「いやおかしくないですか？」

「何がだ？」

「なんで体術でゾンビを完封できるんですか」

「こんなの当たり前だろ」

俺はよくわからない疑問を持っているアーノルドに不思議な顔をしながら廊下を進んでいくのだった。

第5話　そこで出会ったのは

あつという間に廊下にいるゾンビを制圧したジャックとアーノルドは宿直室前廊下を通り抜けて警備員室へとたどり着いた。廊下のほうはすでに血みどろの死体がいくつも転がっており、その死体に食らいつくようにゾンビがあちこちにさまよい歩いていた。

「……ちっ、厄介だな……！」

ゆつくりと起き上がりこちらへと近づいてくるゾンビに対して、ナイフを抜けば一気に踏み込み距離を詰める。生きた人間が近づいてくれば当然のごとく、俺に噛みつきこうとするが、その力を使って背負い投げで地面にたたきつけた。そのまま、流れるように頭部にナイフを刺して、活動を停止させる。

「……先輩一人でもう十分じゃないんですか？」

「何を言ってるんだ……さすがに囲まれたかなりきついけどな」

ゾンビが起きないことをしつかりと確認すれば他の敵を見まわしまだ距離が開いていることを確認してから東側オフィスへの扉を開けて中へと入る。

オフィスの中は散乱しておりいかに緊急事態だったかが伝わってくる。そしてその外にはうめき声をあげて近づいてきているであろうゾンビが窓枠を叩いている音が聞こえる。

「せ、先輩……？」

「気にするな。ここは防弾ガラスだ、何日かは持つ」

ゾンビの接近をしり目にオフィスの中にあるであろう弾薬を回収していく。肩にかけるタイプのボストンバックをアーノルドはオフィスから回収して少し重そうに担いでいた。

「よつと……なかなかこれはしんどいですね？」

「集めることができてるのは9mm弾がほとんどだけだな。これではゾンビはともかく……もつと硬い敵が出てきたら手に負えないかもしれないな」

オフィスをくまなく探し終えて反対側の扉を開けると目の前にゾンビが7体ほどいて、全員がこちらを見た。

「……下がれ!!」

すぐさま転進し来た扉を戻ればあつという間にゾンビが殺到してきて扉を開けようと叩きまくる。それを俺は背中で抑えるがあまりの強さに吹き飛びかねなかった。

「アーノルド!!何か持ってこい!!」

「は、はい!!」

アーノルドは近くにあった椅子を持ってきて扉を固定しその前に大きな柵を持ってきてどうにか扉をふさぐのだった。

「はあ……はあ……えらい目にあつた……」

どうにか息をつくために座り込みながら汗をぬぐって装備を確認した。幸いにしてほとんど弾を使っておらず何か落としたということもなかった。

「さすがにあの道を通ろうとは思わないな……仕方ない、来た道を戻るぞ」

「そうですね……それにあの先は確かシャッターが落ちていたと思いますし……」

「そこを開けてゾンビに入られたら目も当てられないしな」

オフィスを出たところで警備員室に戻ろうとしたところでふともう一つの扉があることが気になった。確かこの道は二階と裏口へと通じる扉だ。

「……ここから戻れそうだな」

「そうかもしれないですけど、安全は確保できませんよ」

「生存者の搜索もあるしな、帰りはここから行くか」

「了解」

外階段を通じて二階に上がれば、妙に閑散としており肌張り付く嫌な雰囲気を感じていた。どうやらアーノルドもそれを感じていたようで銃のグリップを握る手に力が入る。ゆっくりと奥へと進んでいくと、一つの死体が転がっていた。だが、次に瞬間俺たちは驚くことになる。

「……まじかよ」

「な……!?!」

突然死体が動いたかと思うと皮膚という皮膚が剥がれ落ち始め、指先からは鋭利な爪が伸び始めて明らかにゾンビとは違う怪物に変わったのだった。そしてそのモンスターはゆっくりとこちらを向ければ口から長大な舌を伸ばしてきた。その奇妙な攻撃に予測がつかなかった俺はとっさに体を傾けるが、完全にはよけきれず、肩口をかすってしまった。

「ぐう………に、逃げろ………！」

「先輩ッ!!」

驚愕のあまり動くことのできないアーノルドをどうにか逃がそうとするが、怪物がすさまじい速さで俺たちに迫ってくる。逃がすことをあきらめた俺はUSPで露出している脳を撃つが弾丸の威力が足りないのか怯むことはなく、俺を確実に仕留めるためにとびかかってきた。

「やられるかよ………!!」

押さえつけられた無事な右手を使わずに痛む左手にナイフを握って、脳みそに突き刺し始めて怯んだ怪物の下半身に蹴りを加えて引きはがした。

「この化け物が………！」

背中のショットガンを構えれば、頭部に向けて至近距離で発砲した。さすがの化け物も12ゲージ弾薬を間近に食らえればひとたまりもないらしく、活動を止めたのだった。

「あ、ああ………」

「なんて声出してやがる……アーノルド」

「そ、そんな俺なんかのために………」

「俺は……ラクーン市警の警官……ジャック・ノリスだぞ……このくらいなんてことはねえ………」

最も傷からは出血しているものの倦怠感などは感じておらずひとまずは適切な処置を行うべきではあった。

「悪ふざけはここまでにしておいて……ひとまずセーフゾーンへ戻ろぞ、まだ症状は出てないとはいえ油断はできないからな」

「は、はい………」

ひとまず二階の待合室へ戻り、置いてある『救急スプレー』を傷口に吹きかけてその部分を包帯で巻いて固定する。スプレーの効果かなり痛みを引き銃やナイフを握っても特に問題はないぐらいに回復した。

「これでひとまずはよしと……アーノルドどうした」

「いえ……僕ってお荷物なのかなって」

「引き金を引くこともできず、逃げることもできなかったからか？」

「はい……あのままだったらもしかしたら先輩が死んでいたのかもしれないじゃないですか……」

「確かにそうかもしれないな。だが、今の経験が必ずお前のためになるとは思っている。その時が来るまでは先輩である俺が世話をしないな」とな

「先輩……」

ひとまず体制を整えて調達した物資を持ち課長のもとへと戻ることにした。二階を通り抜けてホールに行き、1階の待合室へ行くようにしたところでシャツターが閉まっているのが見えた。

「おいおい……どこの誰がこんなことしたんだ」

「これじゃあ戻れないですね……」

「ひとまず二階の図書室を経由して戻ることにするか」

当初の作戦をかえて図書室を通ることにした。西側のほうはまだ無事だったと思うが件の怪物がほかにもいるかもしれないと考えると油断はできない。ゆっくりと図書室へ通じるドアをあけて中に入る。図書室は物静かでここだけは普段の日常のような雰囲気だった。

そのまま奥の扉を抜けて保管室を通り『S・T・A・R・S』のオフィスに通じる廊下へとたどり着いた。廊下にはまだ電気が通っており明るさは残っていた。

「ここは安心ですね」

「それでもどこから来るかわからないがな」

用心に越したことはないと思い、ゆっくりと進む。そしてオフィスの前に来れば一応中を覗いてみようと思えば扉を開けた。するとその音に

気付いたのか中にいた人物が俺へと銃を向け、反射的にこちらも銃を向けた。

「なんだジャックか」

「ブラッド、いままでどこにいたんだ？」

「外の調査だな、俺は俺で外がどんな状況か知らべていたんだが……どこもかなりひどい状況だな。感染が勢いよく拡大してやがる」

何枚か写真を撮っていたようでそのフィルムを見せてもらうと、辺りには死体が転がりそれに群がるゾンビの姿も映っていた。

「これはひどい……」

「まさに地獄だな」

「ああ、この中に生存者がいるだけまだ救いがあるとは思うがな」

ブラッドは警察署の現状を知ってまだマシだとは判断しているようだが、俺はそれに難色を示す。

「何かあったのか？」

「悪いニュースだな。ゾンビじゃない新種の化け物が現れた」

「なに……!?!?どんな奴だ？」

「四足歩行で舌を伸ばして攻撃してくる奴だ」

「舌……まるで『舐める者』^{カー}だな」

化け物の名前を暫定的に決まったところでブラッドは他にやることがあるようでまた街に戻るらしい。

「とりあえずお前らだけでも無事に生き残れよ」

「ああ、お前もな」

「ブラッドさん、よろしくお願いします」

ひとまずそれぞれの目的に分かれ、俺とアーノルドは改めて弾薬を課長へと届けるのだった。

第6話 崩壊へのカウントダウン

1998年9月26日

どうにか弾薬を届けた俺たちは仮眠をとり、朝に行われる定例会議に参加していた。会議の参加者を見れば皆それぞれが疲弊しており、ろくに休めていないのがよく分かる。

「それじゃあ会議を始める。まずは弾薬の件だが……ひとまずは、9mm弾を回収してもらってきた。分配については後で連絡する」

まずは吉報からなのか枯渇気味だった弾薬が配布されるというところで少しだけ安堵の空気が流れてきた。

「……だが悪いことに、署内において新たなモンスターが出現した。これについては、ジャックとアーノルド……それに、マービンが発見している」

どうやらリックカーは俺たちの他にもマービンのところでも出現したようだった。これで、俺たちが倒したやつ以外にも存在が明らかになつてゐることは明白だ。

そして、会議が進んでいけば外部の警察施設にも何人かの生き残りがいることが判明し、こちらへと合流する手筈になっているようだ。

だが、到着までには道路等の下調べが必要らしく難航してるとのこと。ブラッドのことを話すと課長は難しい顔を浮かべた。

「……まだ難航してることか……」

「一体何を頼んでるんだ？」

「実は……」

その会議の最後に明かされたのは、ブラッドがS. T. A. R. S. の生き残りである『ジル・バレンタイン』を探しているという情報だった。

「とりあえずジルさんがこっちに合流すれば問題はなさそうですね？」

「……いや、いくら人が増えたところで問題は変わらんよ」

会議室を後にして自分の机に座って、使った弾丸を補充しながらアーノルドの行ったことを否定した。

正直なところ、ここがもう限界なのは目に見えている。機能を維持することも出来てないし、警官にも被害者が出ているのは事実だ。

まともに吊いもできず、脳を破壊できなかった死体はやがて動き出し彼我の戦力差を益々大きくするだけだ。

「手があるとするなら……地下駐車場から外に逃げるのが一番いいが、間の悪いことにあの辺の道路は工事が始まったばかりで車では通れない」

下水道の工事が何かで道を塞いでいる状況にこの災害が起きてしまい、車で走る道はかなり限られてしまっていた。

「となると……正門からの脱出しかないですね……車を使うってなる」と

「そういうことだな。外からやってくる連中が無事にたどり着けばの話だが」

そんな話をしていると血相を変えた課長が俺たちのところへやってきた。

「今、アンブレラからの救助部隊が降り立ったそうだ！時計塔から定期便が出るらしい！」

その知らせを聞いて俺とアーノルドは目を合わせるのだった。

□□□□□□□□

ラクーンシティにある巨大なシンボルである『セントミカエル時計塔』。ここに救助ヘリが到着するようで、10時と15時と18時と22時に定期便が出るらしい。

生存者のリーダーになっている課長はすぐさま避難民をトラックへと詰め込んで出発することにしたのだった。その一方で俺達は最後まで警察署に残り、生存者と脱出の糸口を捜す。

「……先輩、なんであっちについて行かなかったんですか」

「あまりにも人が多い上に……外部の連中が来た時にもぬけの殻じゃ寂しいだろ？」

幸か不幸か、警察署に残ったのは俺とアーノルドだけではなく、マービンやエリオットなど、10人足らずのメンバーが残っていた。

最後まで残った連中にもラクーン市警としての意地が残ってるら

しい。まあもつとも、4日後には新入りも来ることだしな。

「新入り……確かレオンだったか、そいつの就任祝いもしてやらないとな？」

マービンはこの状況でもしっかりと後輩の世話をするためにわざわざ、ダイアル式の南京錠をふたつも買ってきて、新入りの机をロックしていた。

俺はそのイタズラに呆れながらもヒントの紙をそつと置いておき、やる気を出させるためにもプレゼントが入ってることを示唆するように置いておく。

「さてと……それじゃあここからは俺が引き継ぐ」

リーダーをマービンに迎えての初めての会議だ。無事な西側オフィスで会議をすることになったが、そろそろ放棄されてもおかしくない状況になってきているのは間違いない。

ちなみにエリオットは、残りのメンバーのためにとサイドバックを調達してきており皆それぞれが装備を充実させていた。

俺も、どうにかほとんどの弾薬を持ち運べるようにはしたが、やはり重量が出てきてしまった。

そんなことをしているうちに会議は本題に入った。なんでも、この警察署は地下に行くとき浄水施設と下水道の管理室への直通リフトがあるらしい。

それをたどっていけばもしかすると外に出られるかもしれないという情報だ。現に先日は怪しい人物の目撃情報があり、逃がしてしまったものの、警察が押収したプラスチック爆弾などが押収物倉庫にしまわれている。

「ここで、悪手かもしれないが……チームをふたつに分ける。俺とエリオットとジャック……それにアーノルドは署内の安全化、その他の人員で脱出ルートへの捜索に向かってくれ」

そうして一回目の会議は解散となった。しっかりと装備を確認し、まずは西側オフィスから2階へ繋がる廊下へと向かう。ここにはまだゾンビの魔の手は迫っておらず少しばかりの警戒で進むことが出来た。

2階にあがり、S・T・A・R・S・オフィスの前の廊下を通って図書室へと進もうとしたところで階下から何かの碎ける音が聞こえた。

「ジャックーまずいことになった、バリケードが突破された!!」

マービンからの悲痛な叫びが通信機越しで聞こえてきて俺たちはすぐさま西側オフィスへと向かう。図書室を経由し、ホール側から入れば既にオフィスの半分ぐらいいまでゾンビがおしよせてきていた。

「マービン、下がれ!」

俺はいちばん近くにいたゾンビの頭をハンドガンで撃ち抜き、そのまま流れるようにもう1人もヘッドショットで撃ち抜く。

「ここはもうダメだ」

「クソ……!」

ある程度距離を開けたところで応戦するのはやめて反転するも、ハンドガン程度の威力では1発だと倒せず仰け反らせるので精一杯のようだ。

「こいつら……前より硬い……?」

「先輩!急いで!!」

何かに気づきそうだったがひとまずは逃げるのが先決だと思い、オフィスの入口をマービンの持つている鍵でロックをする。

「こちらマービンだ、西側バリケードは突破された、繰り返し、西側バリケードは突破された」

「こちら、エリオット!だめだ!2階東側も突破されてる!!」

「ちっ……!ひとまずホールに集合しろ!」

どうやらゾンビの大群がいよいよ俺たちを地獄へ連れていかうとしているようだ。

なんとかかもう一度合流した俺たちだったが、西側へ行くための道は2階の図書室しか残っておらず、東側へは敵が溢れかえっているルートしか使える状況ではない。

「このままだとジリ貧だぞ!」

「……何か手はないのか」

それぞれが不安感でいっぱいになる中、マービンはある決断をし

た。

「……こうなったら地下に行くしかない」

「けど地下下って言ってもどうやって行くんだ？」

「……東側のオフィスに地下の通用口に通じる鍵があるはずだ。それを確保しに行こう」

「それを早く言っただけじゃ欲しかったぜ」

俺たちが行った時に教えてくれればこんなことにはならなかったと思っただがそこまで言うほど冷酷にはなれなかった。

「二手に分けるのはやめだ、全員……生きて逃げるぞ」

「賛成だ、射撃の腕がピカイチのジャックがいるんだ、怖いものなんてないさ」

「だが、自分の身は自分で守れよ？」

ニヤリと笑みを浮かべれば東側のオフィスへと向かうために閉められたシャッターを開けた。まだこの辺りは電気が通っていることもありスムーズにシャッターが開いて、明かりで照らされた廊下が見える。

昨日は扉の向こうにいたゾンビも今は姿が見えておらず警戒度が上がるのは間違いなかった。

「その扉は昨日の時点で俺たちが封鎖した。悪いが回り込むしかない」

「まだ明かりがついてるとはいえ……それでも嫌な雰囲気だな」

とその時、突如停電したのかブレーカーが落ちシャッターを開けていたヒューズが吹き飛んだ。そして、背後ではシャッターが閉まりガシャン！という大きな音が響く。

「お客さんが来るぞ……！」

各人がフラッシュライトを照らして正面を見れば、こちらを食事と思わんばかりのゾンビの大群が廊下せましと襲ってくるのだった。

第7話 抵抗する意志

迫り来るゾンビの群れを相手に、俺たちは自分の得物を構えて戦うことになる。

「いいか頭を狙え、自信が無いやつは足を撃て！」

俺の言葉で足と頭を同時に攻撃して先頭の奴らを蜂の巣にはしていくものの勢いは止まらず徐々に近づかれて居るのがわかる。

「てめえらみたいいな死人には、鉛玉がお似合いさ!!」

メイヤーはショットガンを構えて1歩自分の方から近づき、まとめて何体かを吹き飛ばし、相手の行軍スピードを緩めた。

だが、それは敵にとつてはご馳走が近づいてきたということの同義でもありメイヤーに向かつてゾンビがなだれ込む。慌ててもう1発撃つが今度は仰け反るだけで動きが止まらない。

「や、やめっ………！」

「メイヤー!!しゃがめ!!」

すぐさま俺はショットガンを構えるとあえて少し上の方へと照準を向けてトリガーを引いた。無数の散弾がゾンビ共の頭を直撃し、たらを踏ませる。その間にメイヤーはこちらへと下がる事が出来た。

「は、はあ………はあ!た、助かった………」

「油断するな!相手は人じゃない」

俺は冷静に薬莖を排出させればもう一步踏み込み今度は正面連中の頭部を吹き飛ばすようにショットガンを撃つ。

何体かはそのまま動かなくなり、頭部に当たらなかつた連中も上手い具合に仰け反ってくれた。もちろん味方もただ黙っているのではなく、しっかりと危なそうな奴を牽制、撃破し、メイヤーも同じように頭を吹き飛ばしていく。

「よし、今のうちに通り抜けるぞ!」

俺が殿を務め、他の連中を行かせれば列の後方を走りながら武器をハンドガンに切り替えて後を追う。だが、その時列の上に何かがあるのが見えた。

「上だ!!」

その言葉に反応して咄嗟にしゃがんだ仲間だったが、そこそこ射撃の上手いマイケルは一瞬だけ反応が遅れてしまい、迫り来る舌を避けられずに喉笛を抉り取られた。

間欠泉のような勢いで出血したままその場に崩れ落ちる仲間を見て足がとまるが、すぐさま立ち直ったメイヤーがショットガンでリッカーを真下から撃ち抜いた。

さすがのリッカーもそれには耐えきれずにその場に落ちてきてもがくが、トドメを刺すようにマービンがハンドガンで脳髓に2発鉛玉をぶち込むのだった。

「モタモタするな、敵はまだ居るぞ」

悲しみにくれる暇などなく、俺たちは東側オフィスへと転がり込んだ。ひとまず各人は弾薬をそれぞれリロードしてから鍵の搜索へと移る。

鍵はどうやらちゃんと保管してあるらしく律儀に使用場所まで記載してあったのは分かりやすかった。

「あとはこの鍵を使って地下に行くだけだが……」

今になって目の前で仲間が死んだことのダメージがみな心の響く。いくら慣れているとはいえそれでも悲しくなるのは仕方なかった。

だが、現実になんか悠長な暇はなく今度はオフィスのガラスも破られるのだった。

「嘘だろ!?!」

「今のうちに逃げるぞ」

入ってきたドアを蹴破る勢いで開ければ出待ちして居たであろうゾンビを吹き飛ばして先へと進み、警備員室に入る。そして、廊下へと抜ければその後ろのシャッターを閉めるように操作して、東側1階フロアを隔離するのだった。

「はあ……はあ……くそ、なんでこんな目に……!」

「これではいくら弾薬があっても足らない……!」

ひとまず、メイヤーにショットガンの弾を2ケース渡し、残りは

ショットガンの弾は2ケースになった。ハンドガンの弾はまだ4ケースはあるが、あの勢いで使っていたら足りなくなるのは明白だった。

「これはなかなか使えないですもんね……」

「それは他にどうしようもない時に使うもんだしな」

アーノルドの背中にあるグレネードランチャーはここぞと言う時の必殺武器なため使いどころが難しいが、その事でやはり気にしている様子ではある。

「いいか、お前にしか出来ないことがある。その時に役に立てばいい」
「……先輩……」

とりあえず一息ついたところで廊下を抜けて奥にある扉へと近づく。そこには当然のように鍵がかかっており、さつきとつた鍵を使つて開けることが出来た。

扉を開けて中を通ればそこは別な廊下になっているものの、下へと通じる階段があり、俺を先頭にゆっくりと下っていく。

辺りは静かだが何やら嫌な雰囲気を感じて、角などをしつかり確認すると案の定、ゾンビが何体かウロウロしていた。幸いなことに距離があるため、近寄らずに探索を続けることにする。

「おい、あれ……駐車場じゃねえか？」

「確かに……ここはSWAT専用の駐車場か」

ひとまず、駐車場にたどり着けば無事な車両がいくつかがあり、これなら動かせそうだった。

「……よし、何台か地上に置いておくか」

「そっちの方がいいかもな」

マービンの判断で1度車両を3台ほど地上へと持っていくことにした。俺とアーノルドは現場の死守を任せられ、他のメンバーで車を地上階へと持っていく。

「……先輩、なにか来ます……」

「……隠れるぞ」

アーノルドが何かに気づき、俺とアーノルドは車の影に隠れて息を潜める。するとその後、留置場の方からアイアンズ署長が出てきた。

アーノルドは声をかけようとするが俺はそれを塞ぎ、ジエスチャーで黙るようにいう。

そしてよく見てみると服に返り血のような物がついており、遠目から見る表情はなにかをやり遂げた様な様子だった。そして、彼は留置場とは別のドアを通過して、どこかに行くのだった。

「なんだったんでしよう……」

「さあな、ひとまず戻ってくるまで待機するぞ」

だが、その後2時間経っても3時間経っても帰ってくることはなく、時刻は既に日付を跨いでしまった。

「無線も来ない……下手をすると通じていないだけかもしれないが……」

「ど、どうします?」

「……止むを得まい、1度地上に出よう」

俺とアーノルドはもう1台のパトカーを使って地上階へと飛び出した。車を出すとそこに拡がっていたのは前日よりもさらに酷い状況で、一緒に出たであろう車も既にゾンビに囲まれていた。

「な、なんて……」

「クソっ、だが多分あいつらは乗ってない……!」

俺はすぐさまパトカーを降りると庭園を経由して署内へともどる。アーノルドも遅れてそれについてくるが、ホールにたどり着いた2人を待っていたのはあまりにも酷い状況だった。

いくつもの血痕が残っており、頭部を撃たれた死体が散乱していた。その奥では息を荒くしたマービンが受付のカウンターに寄りかかって座っていた。

「マービン、何があった!」

「ジャック……連中……ふざけた真似をしゃがった……!」

「どういうことですか!?!」

「……館内にある、神経ガス装置を使って区画を封鎖しやがったんだ……これだから知らない奴らは……!」

確かテロ対策にそういう警備装置があるのは知ってはいたが……まさかこんな時に使うとは……

「そのせいで2人死んで、メイヤーとエリオットはその解除に行つて
るが……」

「残りの奴らは？」

「外のヤツらがきて……脱出用のバンに載せた」

「……それで残ったのは俺たち5人つてことか」

「ああ、残ったヤツらならタフだからな」

マービンも思うところがあつたようであるべくなら仲間を死なせ
たくなかつたらしい。

「そうだ、駐車場で署長を見た」

「署長を？なんだってそんなところに……」

「わからん。だがアレはどう見てもおかしい様子だったな」

「そうか……ひとまず、息が整つたら探索を続けよう」

しばらく休憩していると血相を変えたエリオットとメイヤーが合
流した。2人ともかなりヘトヘトのようだった。

「はあ……はあ……こんなのアメフトやつてるよりきついぜ……」

「なんだつてこんなことになつたんだ……」

「2人ともおつかれさんだった。助かつたぜ」

とりあえず、2人を労い休憩させようとしたところで図書室のドア
が開き、俺はすぐさまハンドガンを構えた。

「おやおや、まだ生存者がいたとは」

「……ブライアンズ署長」

扉を開けたのはさつきまで話をしてきた署長本人だった。こんな
緊急事態だと言うのになぜこんなふう悠長に歩いてるのか謎だつ
た。

「署長自ら歩いて……どうなさつたんですか？」

「いやいや、目障りな連中がどうしてるかと思つて見に來ただけだが」

「……目障り？」

その一言に怪訝そうな表情を浮かべれば、次の瞬間1発の銃声が響
き渡つた。葉莢の落ちる音とともにメイヤーの身体が崩れ落ち、その
場に血溜まりを作る。

「……貴様あ!!」

さすがの俺もそれは見過ごせず、ハンドガンに向けて躊躇いもなくトリガーを引いた。狙いは逸れてしまったものの的確に署長の銃をぶち抜き、手から弾き飛ばすことに成功した。

すぐに取り押さえるために追いかけてしようとしたが、それはアーノルドに止められてしまった。メイヤーは心臓を撃たれており誰がどう見ても長くはないと悟ってしまう。

「……はは……こんな……終わり方……なんて……ひっでえ……はなし……」

「メイヤー……」

「なあ、ジャック……おれ、役に立てたか……?」

「ああ、お前の勇気に救われたぞ、みんな……」

オフィス前で戦った時もメイヤーが突っ込まなければ活路は開けなかったし、リツカーの処理ももつと遅れて仲間が死んだかもしれない。

「ジャック……つぎこそ……射撃……勝ちたかつ……」

最後までその言葉は聞けずじまいで物言わぬ骸へとなってしまう。隣ではアーノルドもエリオットも、マービンも何も言えずに黙り込んでいる。

俺はただ無言でハンドガンを抜けば額へ向けて銃弾を撃ち込み、人間のままとしての弔いをするのだった。

第8話 生命の重さ

メイヤーを静かに弔い、簡単ではあるが庭園の墓に遺体を埋めてお祈りを済ませればゆつくりと立ち上がる。

「……あの野郎、会ったら絶対に殺してやる」

「落ち着けよ、ジャック。それで俺たちが死んだらそれこそメイヤーが化けて出てきちまう」

「……けどよ、これからどうするんだ」

結局のところ打つ手はなく脱出ルートの手がかりも残ってはいなかった。もつとも地下をそれほど探索したわけでもなく探せばあるのかもしれない。

「だが、恐らく……これ以上の生存者はいないと思う。そこでここを離れることを提案するが……」

とその時、何かか門を叩く音が響いた。慌ててそちらの方に駆け寄ると10歳ぐらいの少女が中に入ろうとしていた。

咄嗟に銃を構えるがゾンビ化の症状は出ておらず、こちらに助けを求めようだった。

「助けて!!」

「今行くぞー」

門を少し開けて少女を招きいれればすぐに門を固定して外から入れないようにする。ここまで必死に逃げてきた少女は緊張の糸が切れたのかその場に座り込んでしまった。

「よく来たなお嬢ちゃん。勇気のあるスーパーガールだぜ?」

エリオットが冗談交じりにそんなことを言うが少女の顔は悲しみに翳る。それを見てバツの悪そうな表情を浮かべるエリオット。

「ママと連絡がつかないの……警察の人を頼れって言われたけど……」

「ママ……君のママはどこで働いてるんだい?」

優しげな声色で話しかけるマービンに少女はおずおずと答えるのだった。

「私のママは研究者なの……昨日ぐらいに急に電話があって、警察署

に行きなさいって……」

「そうかそうか……もうちよつと早かったら君も脱出出来たんだが……」

あいにくバンはいつてしまいこれからどうするかを考えていたところでの合流となり心細くもあるのはわかる。

「ところでお嬢ちゃんのお名前は？」

「シエリー……シエリー・バーキン」

シエリーと名乗った少女を連れて俺たちは警察署からの脱出を図るのだった。

ひとまずホールへと戻り対策会議を開く。当初の目的は宿直室近くの階段から地下へと降りての探索だ。だがこの子を連れただま行くのは限りなく不可能に近い。

「そうだな……アーノルド、この子を頼む」

「わ、分かりました……！」

「残りの3人で地下へと行くぞ」

メンバーわけを終えて、俺はアーノルドへと声をかける。

「アーノルド、この子の命はお前にかかっている。いいか？俺たちは警官だ」

「分かっています、先輩……俺はもう迷いません」

「……いい覚悟だな、こいつを持っていけ」

そうやって俺は『デザートイーグル』とその弾薬をアーノルドへと渡す。するとアーノルドはゆっくりと首を振って受け取るのを拒否した。

「それは俺には使えません。それに……俺にはこいつがあります」

そうやって背負っているグレネードランチャーを軽く叩いて覚悟を決めた表情を浮かべる。その頼もしさに俺は少しだけ笑いかけて、デザートイーグルをしまった。

「じゃあな、アーノルド……死ぬなよ」

「先輩こそ」

そうして、俺とアーノルドはそれぞれの任務を果たすために別行動を取るのだった。

東側が完全に封鎖されているため、1度外にでてから迂回する形で警備員室に入り、そこをすり抜けてから地下へ通ずる階段をおりる。

一回目に来た時よりも何かがある感覚を強く感じ、俺たちはゆつくりと進んだ。廊下の角から向こう側を覗けばあろう事か、リッカーが廊下を這いつくばっていた。

お互いに顔を見合わせればゆつくりと歩いてリッカーとは反対の方へと歩いていく。そして、駐車場へと入りその先の留置場へと向かう。

なぜこんな所に留置場を作ったかは謎だが、定期的にここの地下道を通ってどこかの施設の点検をしているというのは噂話で聞いたことがあった。

「……なあもう帰ろうぜ?」

「帰るつたつてどこに帰るんだよ」

地下へのマンホールを見つけて降りようとした矢先にエリオットがかなりビビってしまったようで降りようとはしなかった。

「それならエリオットはここで待機するか?」

「……いや、ここに取り残されるほうがもつと怖いな」

意を決してエリオットは梯子に手をかけてゆつくりと降りていく。その後を追うように俺とマービンが下へと降りる。

下にたどり着けばそこには腰ぐらいまでがつかるぐらいに水が流れている地下道だった。どうやらここも下水道にはつながっているようだが水の流れる先は人が通るには困難ではありそうだ。

「……他の道を探すしかないよな」

「ああ、たぶんこの先のどこかにまた上がる梯子があるはずだが……」
その時上から何かの液体が垂れてきてゆつくりと上を見上げれば、そこには巨大なクモが張り付いていた。

「「ぎゃあああああ!!」」

大の男たちが蜘蛛の子を散らすように全力で前へ走る。それを追いかけるように後ろからクモが迫ってきて何か酸のような液体を吐き出した。幸いなことに誰も浴びることはなかったが壁面にかかれば何やら徐々に溶けているのがわかる。

「階段を上がるんだ!!」

俺は殿を務めるように背中からショットガンを取り出せば、上に向けてぶっ放した。見事に散弾が命中したクモは粉々になり地面へと降ってきて体液などが水へと溶けだすのだった。

散々な目にあつた俺たちが梯子を上った先には横合いに一つの扉と奥に水密扉のようなものが見えた。ひとまず手前の扉を開けるとそこは資材置き場のようだった。

「ここは外れか……もう一つの扉を見てみるか」

外に出てもう一つの扉を開けると奥にもう一つの水密扉とその横に何かのパネルが置いてあつた。その中にはプラグを差し込む場所があり、まるでチェスの盤面のようなだ。

「おいおい……ここにきて何かのパズルかよ」

「おまけに道具がないと解くことすらできないおまけ付きのな」

今のままではここから出ることができないと判断した俺たちは元来た道を引き返すのだった。

□□□□□□□□

「あーまた搜索しなおしかよ……」

「なかなかうまくいかないな」

どうにか無事にホールに戻ってきた俺たちはアーノルドと合流し、対策会議を始めた。ちなみにシェリーはアーノルドに引つ付いたままだった。

「どうにもここが怖いんですって」

「……だめ?」

「駄目じゃないよ」

「……実はアーノルドはそんな趣味があるわけじゃないよな?」

「そんなわけないじゃないですか!!」

顔を真っ赤にして否定するアーノルドを先輩警官たちはにやにやしながらからかう。とまあそんな話は置いておいて今後の対策を考え始める。

「次の脱出手段を考えないと。何か思いつくことはあるか?」

「それについてなんだが……その女神像の下って確か隠し部屋か何

かがなかつたか？」

「……まあそれについては噂話程度なら聞いたことがあるが」

「それがどこにつながってるかを調べたほうがいいとは思うぜ？」

エリオットのそのヒントをもとに俺たちは次の行動として、その女神の像を動かすために行動を開始することにしたのだった。まずは実物を見ようということでのその像へと足を運ぶ。

その女神像の前には何かをはめるための形が3つほど空いているのがわかる。

「どうやら……ここにはめれば動きそうだけだな」

「だが、ここにはめ込む何かはどこにあるかだが……」

「この女神像は美術品で入ってきてなかつたか？」

そう言えばというようにエリオットがこれの扱いを思い出し、ひとまず美術品倉庫に何かあるのではと思い行動を開始する。美術品倉庫は二階の東側待合室を抜けなければならないのだが、ゾンビであふれているのは余裕で想像がつくのだった。

「今回もシエリーはお留守番だな？」

「うん……でも怖いからアーノルドさんに残ってほしいかな」

「アーノルドモチモチだな？」

シエリーからの指名でからかう先輩たち。それを真つ赤になって否定するアーノルド。そんな和やかな雰囲気は漂う中、突然東側の待合室の扉が勢いよく開かれた。そこを振り返れば無数のゾンビがこちらへと近づいてくるのが見えた。

「いやああ!!」

「アーノルド、シエリーをしつかり守れよ!」

「はい!!」

それぞれが銃を抜き、ゾンビに対し抵抗を始めるのだった。

第9話 脱出への手がかり

東側の2階扉をぶち破って入ってきたゾンビたちを待ち受けるように階段のところに陣取れば、それぞれの得物で対抗するようにゾンビへと攻撃を加える。

だが不運なことに後ろの正面扉からもゾンビが大量に入ってきた。

「くそ……!! 囲まれたぞ!!」

「この維持は無理だ!!」

「けど西側のオフィスも敵がいるんじゃないのかよ!!」

完全に囲まれた俺たちは動揺して攻撃の精度が目に見えて落ちてきていた。

「やむをえまい……東側に突破するぞ……!!」

「正気かよ!? でもやるしかねえよな……!!」

俺の意見にエリオットはやけになったのかテンションを上げて答えてくれた。

「先輩、離れてください!!」

アーノルドはグレネードランチャーを構えて集団の中央へ向けてトリガーを引く。小気味のいい音とともに弾薬が発射され、着弾すればすさまじい爆発とともにゾンビが吹き飛び、通り抜けられそうな穴ができた。

その穴にエリオットが飛び込み、その後をアーノルドとシエリーが駆け抜ける。そしてマービンがその後を追う。俺は殿を務めるようにハンドガンで後方のゾンビをけん制した。

「ジャック、急げ!!」

ある程度攻撃をしたところで、穴を駆け抜けようとしたときにまだ息のあるゾンビが俺の足にしがみついていた。

「この……!! 離せ……!!」

振りほどくように足をじたばたさせれば、何とか噛まれる前に抜け出すことができ東側の待合室へと飛び込んだ。

「……焦ったわ」

「危なく噛まれるところだったな?」

何とか扉を簡易的なバリケードで塞ぎ、一息をつくと後から汗が垂れてきた。

「アーノルドは判断がナイスだったな」

「やるときはやるんだな？」

「まあ……必死でしたからね」

褒められたアーノルドは心なしか嬉しそうな反応を浮かべていた。ある程度休憩をしたところで俺たちはまとめて探索に移るのだった。

待合室を抜けたところで廊下を進んでいき、美術室へとたどり着いた。中に入ると様々な美術品が並んでおり、中には趣味の悪いようなものも残っていた。エリオットは美術品のリストを探し出すとその中からホールにおいてある美術像を見つけた。

「なるほど……こいつにはメダルをはめないといけないってわけか……」

「そのメダルの手がかりがこいつってわけか」

そのリストの二枚目にはご丁寧に他の像のスロットを合わせれば、メダルを取り出すことができるように説明書きがされていた。

「そのメダル像は、図書室の準備室と3階の倉庫と……またホールに戻るってわけかよ……」

「……かなり難易度が高そうだな」

俺たちの脱出のための行動には無駄な行動が多くなりがちならいには後手後手に回っているような感じが否めない。

「かといってここで二手に分けるのは悪手だとは思うしな」

「……いや、ここは二手に分けたほうがいいんじゃないか？」

その時マービンがそんな提案をしてきた。

「理由はあるんだよな？」

「ああ、現状……アーノルドとシエリー、それに俺とエリオット、あとジャック。この3つのグループはそれぞれに役割を分けるべきだと思うな」

「……それだと俺は敵のせん滅か？」

「端的に言えばそうなるが、ここはあえて俺たちになぞ解きを任せてくれないか？」

マービンは俺を見ながら自信ありげにそう言った。俺は何も言わずに任せるようにうなずくなるのだった。

ひとまず俺は先行的に動くためにホールへとつながる扉のバリエードをどけて扉を勢いよく開ける。その音に気付いたゾンビたちが俺へと殺到するが落ち着いて1体1体をハンドガンで対処していき、確実に葬っていく。

その横を抜けるようにマービンとエリオットがホールのメダル像へと飛びつきあつという間になぞ解きを解いてメダルを取るとそのまま次の像へと向かっていく。俺はまだホールをたむろしているゾンビを相手に図書室への扉を死守するために戦う。

幸いなことにまだ距離があり着実にハンドガンを使って敵を処理していくがいかにせん数が多くなり次第に距離がつまっていくなかに目に見えてわかる。

おまけにハンドガンの残弾が心もとなくなり始めた。残りは2マガジン分しかなく、これ以上は戦うのはまずいと判断して図書室へと退避する。図書室に入れば通り道にゾンビが死んでおりおそらく二人がやったのだらうと判断できた。

「……………うかうか負けていられないか、だが……………今合流したところで足を引く張るかもしれないが……………」

少しだけ迷ったが合流することはやめて、制圧された西側オフィスへと向かうことにした。S・T・A・R・Sオフィスの前を抜けて階段を降りたところで近くの窓からゾンビが入ってきた。

「ここから入ってきてるのか……………」

俺は窓枠を乗り越えてきたゾンビに近寄れば起き上がる前に頭部に足をおいてそのまま思いつき踏みつけてつぶすのだった。あたりにいろいろなものが飛び散るが今更気にすることはなく、オフィスへと足を進める。

その途中で何やら不穏な雰囲気を感じて上を見ればリツカーが2体もオフィスの上で出待ちのように待ち構えていた。それを見て俺はゆっくりと後退し、マグナムを抜いて構えれば近いほうのリツカーを一発で吹き飛ばす。

その銃声に反応したもう1体が音の方向へと飛びかかってきたがスライディングするようにその下をすり抜けてそのままオフィスへと飛び込んだ。目の前をリッカーの爪が通ったときはさすがに生きた心地はしなかったが、何はともあれどうにか逃げる事ができた。オフィスに入ればそこにはゾンビが3体ほどうろついていたが、まだ気づかれておらず近くにいたゾンビの後ろに近づけばそのまま首に手をかけて一気にねじ切るように首の骨を折った。

ほぼ無音に近い形での暗殺に気付くわけがなく、次のゾンビへと手をかける。あつという間にゾンビを始末した俺は自分の机の引き出しを開けて、最後の弾薬セットを取り出す。そしてついに俺の引き出しが空になり、ハンドガンの弾も4マガジンに増やすことができた。そして、オフィスに残されたものをくまなく探してからホールへと戻るのだった。

ホールに戻るとさっきまでいたゾンビは影も形もなくなっておりどこに行ったのか全く想像がつかなかった。ひとまずそれを不思議に思いながらも2階の待合室へ戻るのだった。

「あ、先輩……どうでしたか？」

「そろそろ弾丸がまずいな」

「まああれだけ戦えばそうなりますよね……」

「シエリーは？」

「さすがに夜も遅いですからね、ひとまず仮眠みたいな形で寝かせてますよ」

よく見るとソファアーの上には丸くなって寝ているシエリーがいた。その様子を確認すれば俺は別なソファアーに腰かけてゆっくりと息をつく。

「先輩？」

「どうした？」

「……いえ、なんでもありません」

なぜかアーノルドの言葉が歯切れ悪く、そのことに疑問符は浮かぶがそれを感じるよりも猛烈な眠気が襲い掛かってきて意識を手放すのだった。

□□□□□□□□

「なんだここは……？」

気が付くと周りには誰もおらず、待合室は閑散としていた。さつきまでいたアーノルドもシェリーもどこにもおらず、俺はひとまず待合室から外に出る。外に出ると廊下が燃え上がっておりその暑さに顔をしかめる。

「いったい何がどうなっているんだ……」

少なくともさつきまではこんなことにはなっておらず、俺はいつまで意識を失っていたのか分からなくなっていた。腰に下げたハンドガンを抜いてとりあえず屋上へと向かうために廊下を進んでいく。屋上へとつながる廊下はすべて炎上しており、暑さがひしひしと伝わってきていた。

「やけに暑いな、何が燃えているんだ」

ゆっくりと進んでいき屋上へと向かうと壁にへりが突き刺さっておりそれが燃え上がっているようだった。幸いなことに、給水塔の真下のようなあの給水塔からの水をこぼせば火が消えそうではあった。「さてと……こいつのレバーはどこか」

警察署から街へと降りるための外階段を下りて納屋の近くのレバーを引くために移動を始めた。街の外からはうめき声や悲鳴が轟き、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっているようだった。

「早く逃げないとな……」

そしてレバーのところへとたどり着くとしつかりと給水塔のレバーを引き水を流すと火が消えたように先ほどまでの暑さが嘘のように感じなくなり先に進むことにした。

俺は壊れたへりのところを通ろうとしたときにその向こうから、コートを着た大男が片手でへりをどけてこちらへと向かってくる。その異様な光景に思わず後ずさり逃げようとするが肝心な出口がいつの間にか瓦礫でふさがれていた。

「戦うしかないか」

俺はハンドガンを抜きその大男の頭を狙って銃撃するが全く怯むこともなくその丸太のような大きな腕が音を立てて振りぬかれた。

しっかりと頭を伏せて回避するがその腕が壁に当たれば粉々に砕けた。

その威力に青ざめた俺はそのまま前へと進みすり抜けるように横を抜けるが、あろうことか背中を掴まれそのまま後ろへと投げ飛ばされた。

「がはっ……!!」

壁に叩きつけられれば息ができなくなるほどの衝撃が走りどうにか敵を見ようとすが俺の目には大男が両腕を組んで俺に振り下ろす光景が見え……

第10話 立ちふさがるもの

「はっ……!!?」

がばつと飛び起きれば、周りを見渡す。そこには俺に驚いたアーノルドと寝息を立てて眠るシェリーの姿があった。

「先輩大丈夫ですか?」

「……ああ、最悪な夢をみた」

あんな大男に知り合いもいないが明らかにこちらを敵視していた以上おそろくいつかは遭遇するのかもしれないと思うと、少しばかりぞつとする。

そんな時待合室の扉が勢いよく開かれた。そこには息を切らしたマービンとエリオットがいた。その後ろからは何体かのゾンビが迫っており、ハンドガンを構えればヘッドショットで排除する。

「ジャック、まずいことになった」

「いったいどうしたんだ」

マービンが深刻そうな声色でそんなことを言えば不安になり聞き返す。

「時計塔に来る予定の救助隊が全滅したようだ」

「……まじか」

「それだけじゃない、街の中に見たこともないような怪物が現れたらしい。オフィスの通信機からたまたまそんな情報が入ってきてた」

「このままだと脱出もままならないな……」

「どうやら神は俺たちのことが嫌いなようだ。タイミングが悪くて本当に嫌になってくる。」

「だが、その代わりにしっかりとメダルを集めてきたぜ?」

「そいつは良かった。早速移動しよう」

俺たちはすぐさまホールの女神像へといき、手に入れたメダルをはめ込んだ。すると、すさまじい音ともに女神像の土台部分がせり下がり、地下へとつながる階段が出てきた。

「あとはこいつがどこにつながっているかだな……」

慎重になりながら俺たちは階段を下つていくと不意に入り口が閉まり退路を断られた。

「くそいつも退路を断たれてるじゃねえか！」

「ある意味シンプルで分かりやすいだろ？前に進むしかないのさ」

マービンの発破に完全にやけになつたエリオットはため息をつきながらも覚悟を決めた様子で先へと進んでいく。たどり着いた先には書斎のような部屋がありごく丁寧にも少しの弾薬が置いてあった。その置き方はまるでこの先に何かがあるようなことを暗示させるようだ。

「ここまでくると何か作為的なものを感じてしまうのは俺だけか？」

「奇遇だな、俺も同じこと考えていた」

「来るなら何でも来い！俺はもう驚かんぞ！」

書斎を抜けて先に進めばどうやら警察署の動力部にたどり着いたようであちこちで機械が動いており、その先にはまだ部屋が続いているようだ。

俺たちは2階のフロアを進んでいくと上のほうで何やら人影のようなものが通つていくのが見えた。

「おい！誰かいるのか!!」

エリオットがそう叫びながら人影を追うために走り出す。その後を追いかけるように俺たちも駆け出す、行きついた先にはロッカーが倒れており一人で持ち上げるのは困難そうだ。

「いいかみんなで力を合わせるぞ、せーの」

マービンの掛け声とともにロッカーをどかしたところで不意に上から何かが降つてきた。着地の音の大きさを振り返り、それぞれの得物を構えるとそこにはボロボロの白衣をきた男がいた。

俺たちは怪訝そうな表情を浮かべていたが一人だけ反応が違う人物がいた。

「パパ!!」

「シエリー……」

アーノルドにくつついていたシエリーが目を輝かせながらその人物に飛びつこうとするがアーノルドが腕を引いて止める。

「離して！なんで止めるの!？」

「シエリー……よく見るんだ」

アーノルドはシエリーにそう促し、その姿を見れば突如苦しみだし右腕が爆発するような勢いで肥大化した。

「逃げろ!!!」

「その子をハナセエエ!!!」

俺たちが逃げ出せばすさまじい勢いで追いかけてきて、一番後ろにいた俺はその男に掴まれて後ろへと投げ飛ばされる。幸いにして壁に叩きつけられることはなかったが、それでもダメージはあり一瞬だけ意識が遠のく。

すぐに頭を振り視界をはっきりさせればハンドガンで後ろから銃撃するとその男は鬱陶しいと思ったのか俺に向かってゆっくりと歩みを進めてくる。

「来いよ化け物……相手になってやる」

立ち上がれば、手すりを飛び越え下のフロアへと受け身をとって着地する。その後を追うように化け物も手すりに手をかけて降りてきた。その時にもぎ取ったのか鉄パイプを手に持ち見境なく降りまわす。

「娘をカエセエ!」

「お前みたいな化け物には返せないな」

その男から距離をとれば頭部に向けてハンドガンを撃つが皮膚が硬くなっていてのか怯むことはなく俺のほうへと近づいてくる。しつかりと距離をとって何度も銃撃を加えるがまるで効果がない。

「弾がもつたいない……!」

仕方なくハンドガンをしまい何かないかを探するために辺りを探索するが、その時目を離したのが悪かったのか敵の姿を見失ってしまった。

「どこに行った?」

その時、上から鉄パイプを振りかざして化け物が降ってくる。とっさに気付けたからよかったもののその攻撃は床の一部を砕いてしまいいその破片が俺へと襲い掛かってきた。

まるで散弾のように襲い掛かってくる破片をよけることはできず、当たった痛み動きを止めてしまい、タイミングが悪く振り回した鉄パイプが胴体へと命中し大きく吹き飛んでしまう。

「がはっ……い……あ、やばい……!!!」

衝撃で別なところの手すりに叩きつけられればその手すりが老朽化していたのか俺の体を受け止めきれずにそのまま嫌な浮遊感とともに自由落下し始めるのだった。

□□□□□□□□

「先輩!!」

「くそが……!!!」

ジャックが手すりを超えて落ちていくのを目の当たりにしたアーノルドたちはすぐに逃げるように先へと進むが、シェリーがアーノルドたちとは真逆の方向へと走り出す。

「シェリーどこに行くんだ!？」

「私が狙われてるから! 私なら大丈夫!!」

そう言うのと止める前に隙間からどこかへと逃げていき、アーノルドたちは反対方向へと走り出すのだった。

何とかその施設を抜けると作業員室のようなものを通り抜けてその奥にかかっている梯子を上っていく。梯子をのぼりマンホールをどけて上った先は地下駐車場が広がっていた。

「あそこまで危険なこととしてまた地下駐車場かよ……!!」

「いや、よく見てみる。俺たちが普段使っているところと違う……ここは外につながってるんじゃないか?」

ひとまず三人が地下駐車場に上がれば近くにあるパトカーを漁る。キーが刺さったままのパトカーを調達して乗れば脱出できるのだが。

そんな三人を囲むように何か近づいてくる。最初にそれに気づいたのはアーノルドだった。すぐさまハンドガンを構えそれにつられてマービンとエリオットも臨戦態勢に入る。

三人の前に現れたのは腐敗の進んだ犬だった。どうやら警察犬がウイルスに感染した個体のようだ。

「来るんか!!」

穴が開かないように交互に銃撃をするも犬の機動力が高くすり抜けてくれば近くにいたエリオットにとびかかってきた。意外にも重さがあり犬が喉笛に噛みついて来ようとするのをどうにか止めているエリオット。

「やめろよーくそが!!」

「エリオット!」

横合いからマービンがハンドガンで犬の側頭部を撃ち抜く。至近距離でその返り血を浴びたエリオットは真っ赤に染まりながらごく嫌そうな表情を浮かべていた。

「……いやマジで助かった」

「さすがにあんなのが相手なのは仕方ないよな……」

幸いなことにその他の犬の襲撃はなかったものの、どのパトカーにもキーは刺さっておらず動くことはなさそうだった。

「この近くに事務所があればそこにあるかもしれないな」

「手分けして探してみますか?」

「……いやジャックがいらない以上、一緒に行動したほうが安全だろう」
スリーマンセルで行動をすることにし、近くの扉を開けようとするも電力が落ちているのかびくともしなかった。

「手始めに電力を入れないといけないわけか」

その電子ロックの扉を開けることをあきらめてひとまず別の扉へと近づけばどうやらそこにはロックがかかっておらず無事に開けることができた。

扉を開ければその先はほとんど明かりがついておらずそれぞれのフラッシュライトを頼りにして先を進んでいくのだった。

第11話 出口への光明

電力の落ちた廊下はとても暗くライトだけで照らすのはいささか心もとはなかった。

「確かこの辺に武器庫があったよな？そこで弾薬を調達するか」

「それはいい提案ですね、さすがに結構消耗していますもんね……」

このあたりの施設をしつかりと把握しているエリオットを先頭として武器庫へと向かうとそこには2体のゾンビが横たわっていた。すっかりゾンビになれたマービンはナイフを取り出すと頭へと振るう。

頭に衝撃を受けたゾンビはゆっくりと立ち上がろうとするがその前にマービンのナイフがきらめき脳髓へと突き刺す。

もう一体も同様に処理を行い武器庫においてある弾薬をサイドバックへと入れていく。すると、アーノルドはその近くにあったサブマシンガン『UMP45』を見つけそれを手に取る。

「それは確か……バリーが試作品で納入した奴じゃなかったか？」

「そうなんですか？ええっと……使用弾薬は45口径ですね」

ひとまず近くにあったマガジンを4つほどマグポーチに放り込み、おまけにハンドガンの弾も補充してハンドガンをホルスターにしまふ。

「よし、では探索に移るぞ」

マービンはハンドガンに加え、新しく『M4アサルトカービン』を装備し。エリオットはショットガンだけではなく手りゆう弾を補充するのだった。

外に出てそれぞれが新しい武器を手を持ったまま電力室へと足を進める。廊下は妙に静かで自分たちの吐く息の音が妙に響いていた。

「妙な静けさですね……まるで誰もいないみたいだ」

「だからこそ、不意を突かれたときにパニックになるんだ。気をつけろよ」

先頭を歩くマービンがアサルトライフルを構えながら油断なく歩く。その後ろをサブマシンガンを構えたアーノルドが歩き、エリオット

トが後方を警戒する。

特に敵と出会うこともなく電力室にたどり着いた3人は配電盤に近づくと、目盛りに記されたように安全域のところの値まで電圧と電流を上げれば施設に電力が走り周囲に明かりがともった。

「よし、先に進むぞ」

と、その時不意にガシャンという音ともに金網が落ちる音がして犬の鳴き声が複数聞こえてきた。アーノルドたちが逃げる前にあつという間に距離を詰めるゾンビ犬たちだったが、マービンがアサルトライフルを構え無駄弾をほとんど使わずに退治するのだった。

電力室を出れば今度は駐車場のほうからゾンビ犬たちが襲い掛かるように迫ってくる。

「任せてください!!」

アーノルドはサブマシンガンを両手でしっかりと構える。そこまですぐに反動を感じるも狙ったところ集弾した45口径弾がいつも容易く頭を吹き飛ばす。危なげもなく駐車場へと向かった3人だったが通電したせい、先ほどまでしまっていた外へとつながるシャッターが解放され、外にいたゾンビたちが殺到する。

「2人だけにいい格好はさせられるかよ!」

エリオットは負けじと手に入れた手りゆう弾をゾンビたちの真中へと投げ込む。きつちり三秒後に爆発し無数のゾンビが吹き飛び動かなくなるのだった。

「あらかた片づけたな……どうする、このまま外に出るか?」

「いや、ジャックもシェリーも見つけてない。このまま外に出るのは反対だ」

マービンは確固たる信念をもってそう答える。もつともここから外に出るなどするわけのない男たちは危機的な状況に陥っているであろう2人の行方を捜すのだった。

1998年9月28日

結局のところシェリーもジャックも見つかっていなかった。ひとまず警察署の中をかけめぐるもシェリーはどこにもおらず、昨日

ジャックを落としたあの化け物も影も形も見えなかった。

「八方ふさがりだな……このままだといたずらに弾薬を消耗するだけだ」

「なんだってこんなに見つからないんだ……!」

と、その時マービンのトランシーバーに通信が入る。

『マービン!俺だ、ブラッドだ!』

「ブラッドか、どうした?」

『ジルを見つけた今からそっちに向かう!』

「おお!そうか、期待して待つておく」

「どうしましたか?」

「ジルが見つかったらしい」

それは彼らにとつては吉報だった。なぜなら伝説のS・T・A・R・Sの生き残りだったからだ。その連絡を受けた3人は合流するまでの間ひとまずホールへと移動し休息をとることにするのだった。

しばらく時間がたったところで何やら正面玄関が騒がしくなり3人が外に出ると、そこには醜悪な見た目をした化け物がジルとブラッドに迫っているところだった。

「ジル!ブラッド!!」

すぐさまマービンがアサルトライフルを構えて牽制射撃をする。するとその攻撃に鬱陶しさを感じたのかマービンへとターゲットを変えて大股で近づいてきた。エリオットとアーノルドはすぐに散開しお互いの攻撃が当たらないように位置取りをする。

「3人とも逃げて!!」

「いいからこっちにこい!!」

ジルの警告をよそにマービンが声を張り上げる。すると大男は手から触手を伸ばしてマービンへと振るった。その狙いはマービンの脇腹を貫くコースだったが反射的に身を地面に投げたのがよかったのか攻撃を回避することができた。

「グレネード!!」

アーノルドは炸裂弾を装填したグレネードランチャーを構えて大男の足元へと向ける。小気味のいい音とともに弾丸が飛んでいけば

地面へと着弾した瞬間に爆発を起こす。さすがの衝撃に耐えられなかったのか膝をついてその場にうずくまる大男。

「今のうちだ!!」

エリオットが叫び、皆を誘導して警察署の中へと飛び込む。するとその後ろからドスンツ!という音とともに何かがぶつかる音がした。

「急げ!先に進むぞ!!」

ホールの先にある西側オフィスへと飛び込む彼らは最後にドアの鍵をしめて立てこもった。全員が息を切らせてその場に座り込めば状況を説明してもらおうとジルへと話を聞くことにした。

「今日の夜……ブラッドから電話があったんだけどその直後にあの大男に襲われて、ずっと逃げ回ってるのよ……本当にいやになっちゃう」

「熱烈なストーカーだな。どうだ?人気者になった気分は」

「冗談言わないでよ、マービン。あんなのなんかお断りよ」

「冗談を交えながらここまでの経緯を確認するとどうやらジルだけでなくブラッドも狙われているようだ。」

「どうやら奴は、俺とジルを狙ってるらしいな……」

「ひよっとしてアークレイの生き残りだからか……?」

「だとしたら差し金はアンブレラってことか」

この前の別の化け物を見たというのに短時間に危険度の高い怪物と出会うという状況に3人はかなり疲労を感じているようだった。

「まあちようどいい……幸いなことにこの地下には駐車場がある。その先はおそらく街の裏通りへとつながってるはずだ。そこから出られるかもしれない」

「いい案ね、早く街から出たいと思ったところなのよ」

その時突如ホールへとつながる扉が破られそこからさっきの大男が現れたのだった。

「ジル!早く逃げろ!!」

「ブラッド!?!」

するとジルをかばうためにブラッドがハンドガンでその大男を攻撃する。

「スタアアズウ……！」

手から触手を伸ばした大男はブラッドの足を掴めばそのまま自分のもとへと引き寄せてそのまま頭を掴み持ち上げた。

「がっ……！はなせ……っ！」

「ブラッド!!」

「ダメだ、ジル！逃げるぞ！」

ジルはブラッドを助けようとハンドガンを構えるがマービンに止められて後ろへと引っ張られる。

「化け物……が……！がはっ……！」

そしてブラッドの頭を掴んだ化け物はその手から触手を勢いよく放出してブラッドの口から咽喉を貫通させて、その体を床へと投げ捨てる。

明らかに息絶えた様子の子のブラッドに興味をなくした大男は今度はジルの方へと近づいてくるのだった。

「いそげ！モタモタしていると間に合わんぞ!!」

全力疾走で廊下を走り抜ける4人だったがその大男もかなりの瞬足であつという間に追いつきそうになる。

「こいつは私を狙ってるのね……！」

「恐らくそうだな！」

「だったら……！」

すると突然ジルは窓枠から身体を踊らせて外に出る。大男はそれを見てジルの方へと突撃した。

「3人は早く脱出して！」

「おい、ジル正気か!!」

「正気も正気よ！」

たまたま近くにあったドラム缶をジルが撃ち抜けば、見事に中の燃料に引火したようで凄まじい爆発が起きた。

その爆風をもろに受けた大男だったが膝を着いただけですぐにでも襲ってきそうだ。

「いいから行って！伊達にS・T・A・R・S. を名乗ってるわけじゃない！」

「ジル……死ぬなよ」

マービンは一言だけそういうと、アーノルドとエリオットを連れて再びホールへと戻るのだった。

第12話 迫り来るもの

「もうここは危険だ。すぐさま街の外に出ることを提案する」

「……確かにそのほうがいいかもしれないですね」

「シェリーもジャケットも見つかってないが……」

三人はホールから回り込んで地下の駐車場へとつながる通路を進んでいた。すでに亡者たちの姿はなくなつただ重たい足取りをする男たちの姿しかなかつた。

「……しかたないひとまず歩いて下水道にいくしか……」

ひとまず地下駐車場から徒歩で外に出ればどうやらダウンタウンの裏路地に出たようで遠目には下水道へとつながる道路が見えるのだが……

「くそ、思った以上に工事が進んでねえな……」

「これは遠回りをするしかないな」

路地を進み下水道へと向かう途中に遠くからへりのローター音が聞こえてきた。その音は男たちに希望をもたらずが現れたへりの側面を見て嫌な予感がよぎる。

「おいおいあれはアンブレラのマークじゃねえか？」

「まずいな……」

とその時、そのへりの機体の下から何かが排出され、下水道の目の前へと落着した。土煙が舞いその奥からはさつきまで戦っていた大男とは別の化け物がゆっくりとこちらへ近づいてくる。

そいつは胴体に防弾ベストを着ており露出部分は頭の部分しかないほどに防具が多かつた。

「くそ……こんな時にまでかよー！」

「下がるしかないです!!」

一転してすぐに駐車場へと飛び込みシャッターを閉めれば地上階へとつながる通路を走り抜ける。しばらく走り宿直室へと飛び込んだところで彼らは一息をつく。

「いったいどうなってやがる……！次から次へと……」

「……ここも既に安全じゃなさそうだな……！！」

「どうやってここから脱出しましょうか……」

状況的にもかなり厳しくもあり疲労を隠しきれない彼らは深いため息をついていた。だが、しばらくして扉越しに大腿で歩く足音が聞こえてきた。その音に真っ先に気付いたマービンは口に指をあてると音を立てずにおくのスペースへと滑り込む。

同じように残りの2人もスペースへと隠れれば、その数分後に扉が開かれてさっきの大男が入ってきた。その大男は部屋を一瞥すれば入ってきた扉から出ていき、オフィスのほうへと歩いていくのだった。

「……はああ、行ったか……」

「生きた心地がしなかったぜ……」

もう少しだけゆっくりとした彼らは武装を確認してから宿直室を出てホールとは逆方向に移動し、再び地下駐車場へと歩みを進める。道中では何体かのゾンビが凄まじい勢いで壁に叩きつけられたのか、めり込んだような死体が転がっておりその怪力が想像つくようだった。

地下駐車場につけばシャツターをもう一度開けてそのまま外へと歩みを進めるのだった。久しぶりに外に出た彼らだったが外は外でうめき声と悲鳴……それと腐臭が漂ってきていた。

「どこに行っても最悪だな」

「早くまともな生活がしたいぜ……」

下水道の入口へと足を進めるために工事現場の足場を進んでいく。いつから放置されていたのか分からないが足場はかなりガタガタで一人が歩くのがやつとだった。

「よつと、最後にこれで……!?!」

最後に歩いてきていたエリオットがこちらへ来る途中に突如足場が崩れた。すぐさまマービンとアーノルドが手を伸ばしてどうにか支える。二人で一気に持ち上げてどうにか引き上げることができたが、この道はもう戻れなくなってしまった。

「本当に災難だぜ……なんでこんなツイてないんだ」

「だが真についてないのは明日着任予定の新入りだけだな」

「はは、そいつは違いねえな」

そして三人は下水道につながるトンネルへと足を進める。トンネルからは鼻を突くようなすさまじい臭いが漂い進むのに気が引けるほどではあるが我慢して足を進める。

「つたく、どこもかしこも地獄だな……」

「いくなよ、エリオット。生きてるだけで儲けもんだろ」

「生きてるとはいえまだ、こうやって不快感があるだけ生きてる実感が出てきますよね」

フラッシュライトを点灯させながら先へと進んでいき、水路へとたどり着けば意を決して飛び込んだ。

「文字通りクソツタレだな」

「まったくだぜ、いつから俺たちは下水道の管理人にでもなったんだか」

「最悪ですね……」

腰ぐらいの位置まで下水が上がってくれば嫌でも服はびしょびしよになり不快感に顔をしかめる。おまけに流れている水は濁っておりまともに足元は見えなかった。

「状況的には最悪だな。ゾンビに噛まれてお仲間になるか、傷口から腐っていくかの二択だぜ」

「どっちもごめん被るために早くここを抜けよう」

すると、遠くのほうからおぞましい鳴き声が聞こえてきた。

「あれが俺たちのお迎えか？」

「馬鹿を言うな、あんなのに会いたくなかったら死ぬ気で逃げるんだよ」

しばらく水路を歩くとようやくまともに舗装されたコンクリートの通路が見えてきた。三人はすぐさまそのコンクリートに上がり奥へと進んでいく。しばらく歩くとどうやらさつきまで歩いていたところの上層通路に出たようだ。

「初めて下水道に来たが……結構入り組んでるんだな」

「地図もない俺たちが迷子になってないのは奇跡だよな……」

その時、目の前に下層の通路から白い何かが飛んできた。その化け

物は二足歩行でゆっくりと近づいてくれば口の部分が開き、彼らを丸のみにしようと襲い掛かる。

「なんなんだこいつは!!」

「離れる! 飲み込まれたらひとたまりもない!」

慌てて後方へと下がるもエリオットが足を滑らせてしまった。

「エリオット!!」

すぐさまマービンが振り向き援護射撃をしようとするが敵の軸上にエリオットが重なるという最悪の状況になってしまった。

「くそ! このクソフロツガー! ……」

丸のみしようと口を大きく開ける敵に対してエリオットは手に持っているショットガンをぶっ放す。すると、かなり大きさにのけぞり、どうやら口の中に弱点があるようだ。

それを知ったエリオットは立ち上がりながらその化け物が口を開けるのを待って再びショットガンをぶっ放す。それを3回繰り返し返せば地面へと倒れこみ、ピクリとも動かなくなった。

「ど、どうだこの化け物め! ……」

「だが油断して食われたらあつけないぞ」

マービンが指をさすところにはびっしりと鋭利な歯が生えており飲み込まれたらひとたまりもないだろう。ひとまずその死体を無視して先へと進む。しばらく歩くと制御室のような部屋にたどり着き、ひとまず休息をとる。

その時、部屋に下水道の地図が貼られており現在位置を確認すればどうやらここの部屋にある、水扉の先にどこかへとつながるケールカーがあるらしい。

「だがここでもなぞ解きつてわけか! ……」

「誰だこのロックを作ったのは! ……なんでチェスの駒と組み合わせたんだ! ……」

おまけに全てのプラグがあるわけでもなくいくつかのところは空白になっていた。

「とりあえずはそのプラグを探すところからつてわけか! ……」

「しばらくは下水道を駆け回るつてわけか」

「……気が滅入りますね」

「新入り、ここで休んでおくか？」

「ここまで来たら最後まで駆け抜けますよ」

アーノルドは弱音を吐くも自分の意志で走ることを決意してプラグ集めに奔走するのだった。水密扉とは別の扉を開ければ、橋が上がつている状態の連絡橋へとたどり着き、ギミックを解除して先へと進めるようにする。

その後も何やら複雑なギミックを潜り抜けてどんどん奥へと進んでいく。そしてやけに広い空間へとたどり着き、慣れたように下層の水路へと着地する。

「……何か嫌な雰囲気だな」

「やけに死体が多くないですか……」

何やら大きなこぶのようなものがあちらこちらにできていたり、ゾンビの死体が転がっているが全く動き出すような予兆が感じられない。先頭のマービンがゆつくりと歩いて先に進めば、突然ゾンビの腹から何かが突き破って出ていきどこかへと消えていった。

「なんなんだ……どうなってやがる……」

不可思議な光景を目の当たりにすれば一層警戒感を増して先に進もうとした。だが、目の前に突如醜悪な四足歩行の化け物が立ちふさがる。

その化け物は左腕だけが肥大化しており右腕は退化したかのように着しく短くなっていた。化け物はこちらを見つければ肥大化した左腕を振るう。轟音とともに振るわれた腕は下水に波を立て、俺たちの動きを見事に止めた。

そして先頭のマービンが肥大化した左腕に体を掴まれる。

「がっ……ぐうう……」

その化け物の腕は見た目通りに怪力でもがくマービンだったが拘束は外れ層になかった。

「この……離しやがれ……っ！」

どうにか右腕を抜いたマービンはナイフを取り出しその腕へと突き立てる。その痛みに驚いたのか拘束が緩めば、すぐに抜け出して地

面へと着地した。その隙を見逃さずに頭部へと銃撃を加える。

「これでもくらえー！」

アーノルドは炸薬を装填したグレネードランチャーを放てば、見事に肩部へと命中するも一撃で倒れることはなく、肩の目玉が露出するぐらいのダメージが通った。

「あの部分を狙うんだ！」

目ざとく弱点を看破すれば集中的に銃弾を叩きこんだ。すると、化け物はその場で崩れ落ち、二度と動き出すことはなかった。

「まるで化け物のデイスカウントストアだな」

「こんな大安売りするデパートになんか行きたくないけどな」

ひとまず奥へと進んでいき、梯子を昇ればその先には古い扉が見えてきた。扉を開ければそこは古い大きな倉庫のようでご丁寧にも予備部品としてチェスのプラグが置いてあった。

「どうやらこいつのようだな」

「早いところ戻ろうぜ。一刻も早くこんなところからおさらばしたい」

「同感です……」

チェスのプラグをとり戻ろうとしたところで何やら大きな揺れが三人を襲った。とつさにしゃがむが地震にしては揺れ方がおかしく、一同は不安を覚えた。

「……なんだったんだ今のは」

「俺は早いところ逃げたほうがいいと思うぜ」

そうと決まれば、すぐに三人は外へと飛び出す。だが、彼らを待ち受けていたのはさっきの揺れに睡眠を邪魔された無数のゾンビと醜悪な化け物が3体ほどだった。

「……駆け抜けるしかないな」

「その通りですね……!!」

「理不尽すぎるだろ……」

そして三人はどうか生き延びるために武器を構えるのだった。

第13話 先の見えない攻防

「なんだよこいつら、本当にどこから来るんだ」

「まったくだ、モテるのは女の子だけにしておいてほしいもんだぜ」

近づいてくるゾンビを排除しながらも退路はない以上、隙間を作るように前へ前へと前進していく。もちろんその分敵との距離は近づいていき攻撃を受けそうになる場面を増えてきた。

「横だ、エリオット」

「おおっとー！」

マービンの警告に反対側へとサイドステップをして距離を開ければ次の瞬間にはマービンの射撃がゾンビを倒す。

「マービンさん、8時の方向です！」

アーノルドが警告を言えば、すぐに距離をとりアーノルドがサブマシンガンでゾンビを撃つ。

「アーノルド、後だ！」

回避してアーノルドを向いていたエリオットがアーノルドの後ろに迫っていた醜悪な化け物を見つければすぐに手りゅう弾のピンを抜いてそいつに投げつける。きっかり3秒後に爆発を起こし、その化け物はその場にうずくまった。

「活路は見えた、進むぞ!!」

やがて敵の数が散発的になり突破口が開ければすぐさまそこから、上層水路への梯子へと移動し、どうにか上ることができた。上がればプラグをもってさっきの管制室へと移動する。

「どうにかプラグはそろったな、この先に脱出できるような施設があればいいんだが」

「これで空振りだったらシャレにならねえ」

移動しながら残弾を確認する3人。マービンはアサルトライフルのマガジンが残り2つ相当とハンドガンのマガジン2つ相当。

エリオットはショットガンのマガジンが2つ相当と手りゅう弾が2つとハンドガンのマガジンが2つ。

アーノルドはサブマシンガンのマガジンが2つに、グレネードラン

チャーの炸裂弾が3発と硫酸弾が4発、ハンドガンの弾が2マガジンだった。

「どこかで弾が補給できればいいんだが……」

「願わくば何も無いといいんだがね」

「ひとまず先に進むしかないですよね……」

とその時、再び地震が起きる。今度はさつきよりも大きくその場には立ってられないほどで3人ともその場に手をつけてしゃがんだ。

「おいおいここまで強いって聞いてないぜ!？」

その振動に耐えきれなかったのか、頭上から何か埃のようなものがパラパラと降ってくる。

「……ッ!!まずい!!」

マービンが叫び声をあげた瞬間、頭上のブロックが崩落を始めた。それぞれがどうにか移動して崩落に巻き込まれることはなかったが、アーノルドだけが分断されてしまった。

「アーノルド無事か!!」

「だ、大丈夫です!」

「くそ!ここしか道がないっていうのに……」

プラグを持っているアーノルドはたまたま管制室へとつながる通路へと身を乗り出していたが、2人はその手前に取り残された。

「俺たちのことはいい、お前だけは脱出しろ」

「先輩方を置いてはいけません!!」

「行くんだ、アーノルド。俺たちは俺たちで、違うルートを見つける。信じる、先輩を」

「……わかりました、絶対に生きてください!……!」

「ああ、もちろんだ」

アーノルドは迷いを断ち切って管制室へと向かったのだった。

□□□□□□□□

「……いいのか、後輩を放っておいて」

「仕方ないさ、ここしか道はなかったんだからな」

瓦礫の奥に取り残されたマービンとエリオットはすぐに来た道を

戻ることにした。プラグこそはアーノルドが持っているものの、下水道の地図はエリオットが持っていたため、この近くにある管理人室へと行くことにした。

どうやらこの部屋には隠し部屋があるようでそこにはリフトが置いてあるようだ。

「こいつを使って一度警察署に戻るのもありだろうな」

「やれやれ……またあの地獄に戻るのか」

こうして男二人は警察署へと戻るために移動を開始するのだった。幸いなことにその後は地震が起きることもなく無事に管理人室へとたどりついた二人だったが、柵とわずかばかりのものしか置いていなかった。

「おいおい、どこにもリフトがないぞ」

「いや、たぶんここだな」

エリオットが動揺するが、マービンは落ち着いて一つの柵に近づけばそれを横合いから押してずらす。するとその後ろに空間がありそこにリフトがあった。

「こんな仕掛けをするとはな、性格悪いぜ」

「けどこれで内通者がここを使ってあちこちで入りしてるのは分かったな」

「ちっ、どこまで腐ってやがる」

リフトに乗り上昇しながら悪態をつくエリオットだが、その気持ちはマービンも感じていた。そして、リフトが到着し外に出ればそこはジャックが肩に目玉のついた化け物に襲われたところの手前どころだった。

「なるほど……ここにたどりつくわけか」

「下水道も警察の私物になってたのかよ」

ホールへと移動するために迂回するように地下駐車場を移動して宿直室を通り抜ければオフィスの前に差し掛かったところで突如外へと続くドアが開かれて、防弾ベストを着た大男が現れた。

「冗談じゃねえぞ!!」

「くそが！」

ダッシュでホールへと続く道を移動する2人だが、大男もかなり大きな歩幅で追いかけてくる。

「こんな時にゾンビまでいるのかよー！」

走りながら正面にゾンビを認識するとその横をすり抜けるためにマービンがタックルをかます。タックルを受けたゾンビは仰け反り、できた隙間を駆け抜ける。

やがてホールが見えてくればエリオットが先頭を走ってシャッターを抜ける。マービンは牽制射撃を行いながら大男から逃げるが、ついにアサルトライフルの弾がなくなってしまった。

「弾切れか……い！」

銃撃が止んだ隙に大男が大腿で近づいてくれば、マービンを掴んでオフィスの方へと投げ飛ばす。

「マービン！」

エリオットがすぐに通路へと戻ってきて後ろからショットガンで攻撃をくわえれば見事に怯み、大男が壁に手を着いた。

「こつちだー！」

マービンへと駆け寄り身体を起こせばその大男を通り抜けてホールへと向かう。だが、簡単には行かず今度はエリオットが壁へと叩きつけられた。その衝撃でシャッターのヒューズが弾け飛んだ。

無情にもシャッターがゆっくりと降り始める。

「エリオット!!」

「いけよ……マービン！」

位置関係的にもマービンの方がシャッターに近く、エリオットは大男を抜けないとシャッターには行けなかった。それをわかっていたマービンは、悔しそうな表情を浮かべながら、ホールへと行くのだった。

「ははっ、ほら来いよバケモノ！」

フラフラになった身体に鞭を打つようになんとか起き上がればこちらに殺意をぶつけてくる大男に対して再びショットガンを向けた。

ホールへと飛び込んだマービンの背後でシャッターの閉まる無情な音が響く。アサルトライフルは既に弾切れになり投げられた拍子

での通路に落としてしまった。残った武器はハンドガンとナイフだけだ。

「次はどうする……」

だが、ホールも安全地帯ではなく、目の前にゾンビが現れた。すぐにハンドガンを抜いて構えるが引き金を引くのに躊躇ってしまった。

「ブラッド……」

なぜならかつての仲間であるブラッドだったからだ。おぼつかない足取りではあるが確かにマービンへと近づいてくるブラッド。

「ブラッド……許してくれ」

「ゆる……して……くれ……」

そんな時ブラッドからまだ意志の残った声が聞こえ、マービンが銃の構えをとく。その隙についてブラッドがマービンへと飛びつき、脇腹へと噛み付いた。

「があああ!!」

どうにかもがいて振り払えば、銃を構える余裕もなく、痛む腹を抑えながらどうにかその場を後にするのだった。